

# 社会主義 体制史研究

No.27 (Feb. 2022)

【資料検討】ノエル・フィールド関連肅清に関する東独 SED 中央委員会・  
中央党統制委員会の声明(1950年8月24日)

青木國彦(東北大学名誉教授)

Dokument-Überprüfung :

"Erklärung des ZK und der ZPKK zu den Verbindungen ehemaliger  
deutscher politischer Emigranten zu dem Leiter des USC  
Noel H. Field" (24. August 1950)

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)



レオン・トロツキー(中央)と亡命したソ連諜報幹部クリヴィツキー(向かって左端)

社会主義体制史研究会

The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System



## 【資料検討】米国ノエル・フィールド関連粛清に関する東独 SED の声明 (1950年8月24日)

青木國彦\*\*

Dokument-Überprüfung:

"Erklärung des ZK und der ZPKK der SED zu den Verbindungen ehemaliger deutscher politischer Emigranten zu dem Leiter des USC Noel H. Field" (24. Aug. 1950)

Kunihiko AOKI\*\*

### 目次

1. はじめに<sup>1</sup> 1
2. USC・OSS・クリヴィツキー・クチンスキーとフィールド 2
3. 「声明」の「結論」:処分 3
4. 除名対象者およびエリカ・グレーザーの略歴 3
5. 統制委員会(ZPKK)による「調査の結果」:経緯と罪状 6  
(補注1) 独ソ不可侵条約秘密議定書 11  
1)内容 11  
2)スターリンによる隠蔽と露見 12  
3)元ソ連諜報幹部クリヴィツキーによる暴露 12  
4)ナチが権力を握れば「我々は落ち着いて社会主義を建設することができる」(1931年スターリン):ノイマン証言 13  
5)斎藤(1995)の擁護と幻想 15  
6)多方面への深刻な打撃:レオンハルト(1992)が收拾 16  
(補注2) スターリンのコミンテルン解散理由 18  
(補注3) ベルリン・カールスホルストのソ連軍政部跡 18

略語・引用文献 19

『社会主義体制史研究』既刊 21

### 1. はじめに:「声明」とフィールド<sup>1</sup>

1940年代末から1950年代初めに一連の東欧諸国で元アメリカ国務省職員ノエル・H・フィールド(Noel H. Field、1904-1970、**図1**)との関係を問題にした大きな粛清事件が起こった。

先陣はハンガリーで、盛田(2020:271-2)によると、1948年9月ソ連内務省ブダペスト代表部が「ハンガリーはほかの東欧諸国より、内部の敵や民族主義者との闘いが不十分」と注意喚起し、ラーコシ[支配党である勤労者党書記長]が「西欧亡命組」に目を付け、フィールドやスーニイ(後述)を利用して1949年10月外相ライクを死刑にするなど粛清を実行した。

この粛清は東独にも波及し、1950年8月24日に調査結果と結論が発表された。それが東独支配党であるドイツ社会主義統一党(以下 SED と略記)の「元ドイツ政治亡命者と USC[欧州]責任者ノエル・H・フィールドとの結び付きに関する中央委員会と中央党統制委員会の声明」(ZK der SED 1952:197ff.)<sup>2</sup>である(以下「声明」と略記)。

本稿は、すでに未定稿として学会発表した(青木 2016:第8節)のうち、ゴルバチョフと KGB によるホーネッカー退任秘密工作の部分を増補する作業の一部である。

ゴルバチョフは当時東独スパイ機関責任者(「偵察本部長」であったマルクス・ヴォルフ(Markus Wolf))を後継書

記長に考えた。そこでヴォルフの経歴と思想をまとめる際のいわば補注として着手したのが、この粛清事件である。内容が補注の枠を越えるので、ここに取りまとめた。

若きヴォルフはこの粛清事件東独版の現場(ベルリン放送)で粛清側のために闘った。それを履歴書の中で誇ったが、のちの回想では全く触れなかった(2節)。

この粛清事件は、東欧諸国同様に、その前の(ソ連占領地区での)共産党・社会民主党合同(SED 形成)過程とともに、スターリン体制組み込み強化作業の一環であったが、同時に戦前・戦中のソ連の対独政策(とりわけ独ソ不可侵条約と英米帝国主義の評価)をめぐる戦後決算でもあった。「声明」はその理由付けの詳細さゆえになおさら歴史の偽造を露呈した。

図1 ノエル・フィールドと妻ヘルタの墓標(ブダペスト)



(出所) (free to share & to remix)

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Noel\\_field\\_tomb.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Noel_field_tomb.jpg)

「声明」はフィールド関連粛清東独版の政治的内容を詳しく明らかにした上で、除名6人と罷免等4人の処分を発表した。その17印刷ページの大部分が長々と続く糾弾(経緯と罪状)であり、末尾2ページに「結論」(処分)がある。本稿では「結論」を3節で、糾弾の内容は5節で紹介する。

これら処分者(犠牲者)には司法の有罪判決が伴う者もいた。処分(合わせて犠牲者者と呼ぶ)。彼らはわが国ではほとんど知られていないので、除名対象者の略歴を4節で紹介する。紹介の際に原文の順序を変更することがあり、また姓名紹介後の人名はできるだけ姓に簡略化し、名に簡略化する場合はその旨記す。

上記10人に加え当時米国籍のエリカ・グレーザー(途中姓が変わるのでエリカと略記)も犠牲者で、除名者パウアーと同様に死刑判決を受けた。その略歴を4節に加える。彼女はフィールド夫妻の養女であったが、夫妻と彼女の関係を「声明」は「道徳的放蕩」、「三角婚姻」と非難した(5節)。

除名者もエリカも名誉回復されたのだから、この粛清は

\* in: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

\*\* 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University  
mail to: aoki\_econ3tohoku.4.5 (3=@, 4=ac, 5=jp)

1 引用中の□(長文では太字)内と...(省略)は青木による。

2 表題には「中央委員会と中央党統制委員会の声明」とあるが、末尾にある声明発信者は「中央委員会」のみである。

明らかに茶番劇であったことはすでに明らかである。

しかし、「声明」の内容は当時の歴史展開の論理を示すものであり、とりわけ戦後の東独 KPD ないし SED の主流・非主流人物たちの政治的性格、それに影響したスターリンの対独政策(独ソ不可侵条約とその秘密議定書)および大戦における英米ソ連合を考える材料の 1 つである。

「声明」は、元コミンテルンとドイツ共産党(以下 KPD と略記)の幹部ミュンツェンベルク(Willi Münzenberg)の元秘書テンピがフィールドと関わったことによって、フィールドとトロツキストの反スターリン共謀の印象を与えようとした(5 節)。スターリンがミュンツェンベルクをトロツキストとしたので、「声明」はテンピもトロツキストだとした。犠牲者クライケマイアーもミュンツェンベルクと関わった(4 節)<sup>3</sup>。

ミュンツェンベルク自身は 1940 年 6 月に死去し、この粛清の犠牲者ではない。彼は独ソ不可侵条約締結を自身の新聞の中で「裏切り者はスターリンお前だ！」と弾劾した。

1941 年からソ連は米英と「連合」し、戦争遂行に米国の物的支援が不可欠であった。だからスターリンはコミンテルンの解散さえ断行した。彼は解散理由をコミンテルン公式声明よりも率直に語った(補注 2)。

西欧亡命中の粛清犠牲者たちが、後述の米国 USC 欧州代表で、ソ連に同情的でもあったフィールドと協力したのは、米英ソ「連合」の反映ないし一環であった。彼らは「スターリン、お前こそもっと重罪だ！」と言いたかっただろう。

現に主犯とされたパウル・マーカは当時統制委員会に、フィールドとの関係は「ルーズベルトとソ連の協力の始まりの時期の特別な状況下で…生まれた」と反論した(5 節)。

フランス亡命組は独ソ同盟直後の独仏戦争状態入りのため、[元々は反ナチであっても独ソ同盟のため同類となり]敵性外国人として収容所に抑留されるという被害にあった。そこは比較的逃亡し安かったらしく、多くがスイスなどに逃亡した。

除名者の一部はベルリンのソ連軍政部付属施設に移された(4 節)。そこで補注 3 に同跡地の一部にある「ドイツ・ロシア博物館」とその屋外展示を紹介する。

ソ連軍政部は S バーン駅カールスホルスト(Karlshorst)の近く(とはいえ徒歩ではかなりかかる)に置かれ、カールスホルストがその代名詞になった。当時東独政府の代名詞は所在地区からバンコウであった。軍政部跡は 1963 年東独に返還されたが、1980 年の市街地図でも白地が目立った。KGB が使ったからだろう(補注 3)。

## 2. USC・OSS・クリヴィツキー・クチンスキーとフィールド

<sup>3</sup> ミュンツェンベルク(Willi Münzenberg)は、レーニンがすでにスイス亡命時代にその組織能力を評価し、革命直後のロシア労働者の窮状救援を彼に依頼し、彼が「国際労働者救援会」を作り大規模な救援やロシア視察旅行団を組織し、宣伝活動のための新ドイツ出版社を初めとする企業群や図書館の経営にも成功し、「最初の共産主義的経営者」(Weber 2008:624)と呼ばれた。彼は党内左派のノイマン(Heinz Neumann)を支持した。ノイマンの妻は彼の「人生伴侶」・新ドイツ出版社支配人バベット・グロスの妹であった。ノイマンは一時期ドイツ共産党のテールマン(Ernst Thälmann)と並ぶ指導者であったが、スターリンと対立して失脚し、1937 年銃殺刑となった。ミュンツェンベルクは 1937 年のスターリンによる逮捕命令(事実上の死刑判決)を巧みに切り抜けた。フランスで人民戦線結成に成功するなど反ナチ闘争に尽力したが、1940 年謎の死を遂げた。わが国でのミュンツェンベルク伝記

「声明」表題にある「USC」は米国のユニテリアン奉仕委員会(Unitarian Service Committee)の略称である(以下 USC と略記)。

USC は 1961 年ユニバーサリストと合流し、ユニテリアン・ユニバーサリスト奉仕委員会(UUSC)になった。そのウェブサイトには、UUSC は「草の根協力を通じて人権を促進する」とある。「草の根協力を通じて」が特徴である。

東独におけるフィールド関係者の摘発と処分では、「声明」によれば、ハンガリーにおけるライクとブルガリアにおけるコストフの裁判、特に前者が参照された。

ライク裁判とその際のフィールドとの関係については盛田(2020: 271-288)に詳しい。ブルガリアの元コミンテルン執行委員コストフ(Traicho Kostov)はいわゆるチトー主義との関係を名目に処刑された(沢田 1976)。

マルクス・ヴォルフの言葉が当時の東独の雰囲気を実に物語る:「私はシュミット、およびパウアーやゴルトハマーの徒党の有害な方針と闘った」(Fricke 2003:287、4 節参照)。ヴォルフはソ連での亡命生活からの帰国直後は、k の 3 人がいたベルリン放送に配置されていた。

一連の粛清の口実に利用されたフィールドの活動は USC メンバーとしてのそれであった。USC はスペイン内戦や第二次世界大戦における難民(主にスペイン共和国派や社会主義者、共産主義者などの政治的亡命者)の救援に大きな役割を果たした。そのために USC マルセイユ事務所で奮闘したのがフィールドと妻ヘルタ(Hertha)であった。

英国生まれのフィールドは、米国ハーバード大学卒業後 1926 年米国国務省入り。1936 年国際連盟に転じ、その後 USC に移った。そこでソ連情報機関欧州責任者クリヴィツキー(補注 1 にある図 7)のスパイ網<sup>4</sup>に引き込まれた。スイスでは旧友の米国戦略諜報局(OSS、CIA の前身、以下 OSS と略記)ベルン支局長アレン・ダレスに出会い、USC の難民支援事業を続けながら OSS に協力し、OSS が彼に KPD [の亡命者]との接触を命じた。その際クチンスキー(Jürgen Kuczynski)が関与した。

戦後フィールドは国務省復帰を意図したが、共産主義者だとの「偽証」があったため、妻とともにチェコスロバキアに逃れた。その後ハンガリーで逮捕され、[ライクらの]粛清裁判での証言を強要された。5 年後釈放されたが、ハンガリーに留まり 1970 年死去した(ポルマー他 2017:582)。

Velázquez-Hernández (2019) による 1940-43 年の USC マルセイユ事務所の様子の紹介では、フィールド夫妻は主にスペイン内戦に敗れ亡命した共和国派の救援に

としては主にその人生伴侶グロスによる伝記に依拠した星乃(2009)がある。それを補足する別稿を用意中である。その際にはノイマンとその妻マルガレーテも取り上げる。

<sup>4</sup> <https://www.msx.co.jp/book/author/ka/14522>によると、クリヴィツキー(Walter G. Krivitsky、本名サムエル・ギンスブルク)は、1921-23 年赤軍第四部[GRU の前身]勤務、23 年ドイツで地下活動、25 年第四部ヨーロッパ担当、33 年モスクワの軍需産業研究所所長、35 年赤軍から秘密警察[NKVD]諜報部に転籍、オランダのハーグを拠点に活動、37 年 10 月パリで亡命、11 月アメリカ移住、40 年 1 月英国 MI5 にソ連諜報網の情報を提供、41 年 2 月 10 日ワシントンで謎の死を遂げた。

彼は独ソ接近を事前に英紙上で指摘、ソ連による日本の外交暗号解読も明かした(リード 2001:訳者解説)。

奮闘した。その姿は「スパイ」とは無縁である。

上記のクチンスキーはのちに東独社会科学界を代表する 1 人となった。彼(1904-1997)は 1930 年 KPD 入党、すぐ党機関紙「赤い旗」(Die Rote Fahne) 経済担当編集委員、1933 年 KPD 帝国指導部で非合法活動、1936 年英国へ逃亡、1944 年まで KPD 英国指導部員などで活動、戦後 1946 年から SED に所属し、ベルリン大学教授となった(Müller-Enbergs 2010:739f.)。

彼は英国亡命中に「OSS で任務」に当たり、またソ連軍情報総局(GRU)のエージェントでもあった。彼は「ソヴィエト諜報機関の同意のもとに」、米国対独戦略爆撃調査団(USSBS)に参加し、そこで得た「極秘」情報を「ソビエトの重要スパイであった妹ゾーニャ」(Sonja、かつての上司ゾルゲが与えた暗号名で、またはソニア(Sonya)、本名ウルスラ(Ursula))が無線機でモスクワに送った。また彼は 1941 年に英国原子物理学者クラウス・フックスをソ連大使館に紹介した(Kuczynski 1992:18,432; J17,481、ポルマー他 2017:256-258)。

犠牲者たちは、フィールドへの協力と彼の背後に OSS がいたことが罪とされた。彼らの OSS との関係は間接的にすぎなかったが、クチンスキーは直接 OSS の「任務」に就いた。それでも罪を問われなかった。ソ連情報機関エージェントであり、しかも米軍重要情報の通報、原爆開発手助けなどの功績を挙げたことが効いたのだろう。

フィールドには米ソ独の共産党に入党ないし志願といった諸説もある。ただ上記や以下の内容から、彼が USC としての亡命者支援を熱心実施したことは間違いない。

犠牲者やクチンスキーの例のように、大戦時に西欧に亡命した党员にとってナチ政権打倒のための米英との協力は当然ありえた。両者はソ連の「連合国」だったからである。

ソ連自体が特に「アメリカ帝国主義」の大きな物的支援を受けた。スターリンは米英との「連合」のためにコミンテルン解散にさえ踏み切った(補注 2)。フランスやスイスにいた亡命 KPD 党员にとって、彼らに資金援助する米国人との協力は反ナチ「米ソ連合」の一環をなすものであった。

KPD 党员から見ればスターリンこそ裏切り者であった。同党はナチと武装闘争を繰り返し、ナチの政権獲得後は非合法化され多くの党员が投獄や亡命となった。だが彼は独ソ友好中立条約(1926 年、両国軍の協力を含む)を 1933 年に延長し、亡命 KPD 党员を何百名かゲシュタポに引き渡し[その 1 人がミュンツェンベルクの義妹マルガレーテ・ブーバー=ノイマンである]、独ソ戦開始直前までドイツに軍事物資を輸出し(リード 2001:訳者解説)、空軍演習場提供などナチ再軍備に手を貸した。

その上 1939 年には共同侵略のための秘密議定書を含む独ソ不可侵条約を結んだ(補注 1)。東独で人気となった 1980 年の東独映画「婚約者」(Die Verlobte)さえ、刑務所内の KPD 党员が、看守からだったと思うが、同条約締結の知らせに動揺する場面を描き、東独市民を驚かせた。

### 3. 「声明」の「結論」:処分

「米国諜報機関は今日の人民民主主義諸国[ここでは東欧諸国]において世界大戦中に得た結び付きを政治的分解やサボタージュ、ソ連との戦争準備、民主的秩序に対する反乱の組織化のために絶えず利用し」、「わが党[SED]党员との結び付きが同じやり方で利用される危険が存在す

る。だから階級闘争の尖鋭化がその種のすべての危険に対するわが党の最大限の防御を要求している」。

[このようにいわゆる階級闘争激化論を強調して以下の措置を合理化しようとする。なお SED は 1946 年 4 月にソ連占領地区の KPD とドイツ社会民主党(以下 SPD)が「合同」して設立された。実態では前者が後者を吸収した。]

#### ●処分:「党から除名」

パウル・マーカー(Paul Merker)、  
レオ・パウアー(Leo Bauer)、  
ブルーノ・ゴールドハマー(Bruno Goldhammer)、  
ヴィリー・クライケマイヤー(Willy Kreikemeyer)、  
レックス・エンデ(Lex Ende)、  
マリア・ヴァイターラー(Maria Weiterer)。

理由:「フィールドと最も緊密に結び付いた」彼らは、「広範囲にわたる方法で階級敵を援助」した。

[この「階級敵」とは西側の、特に「アメリカ帝国主義」、具体的にはその出先 OSS 欧州本部とその責任者アレン・ダレス、その指揮下にあるとされたフィールドを指す。]

#### ●処分:「職務罷免」、「調査継続」:

ブルーノ・フーマン(Bruno Fuhrmann)  
ハンス・トイブナー(Hans Teubner)、  
ヴァルター・ベリング(Walter Beling)、  
ヴォルフガング・ラングホフ(Wolfgang Langhoff)

[彼らの氏名には引き続き「同志」が付記された。]

理由:「同様にフィールドとの関係が非常に緊密であったが、その活動は階級敵の間接的支援に留まった」。

処分に関連して党指導部も自己批判した[たぶんソ連向け]。すなわち、「責任ある党幹部の英米諜報機関代表者との結び付きについての調査結果は、党指導部およびすべての党組織、すべての個々の党员にとって深刻な教訓である。党幹部の警戒心も十分ではなかった。第 3 回党大会[1950 年 7 月]まで党指導部内には、過去に深刻な誤りを犯した党幹部たちに対する日和見主義的傾向が存在した」。

「結論」は、東独内での最近の「敵対勢力のサボタージュ活動が増加したという事実」を挙げ、「少なくない党幹部が軽率にこれらのエージェントの活動を助長した」と批判し、「党のすべての基礎組織に自らの党活動を点検し」、「敵対的な活動」対策の確定を「要請する」と締めくくった。

### 4. 除名対象者およびエリカ・グレーザーの略歴

上記の除名者 6 人とエリカの略歴を紹介する。エリカは SED 党员ではなく除名者ではないが、パウアーと同罪(ソ連側による死刑判決)とされたので、ここに加える。

除名者の名誉回復は早期だった人も、ようやく SED 自体の末期 1989 年末になった人もいる。名誉回復後それなりに活動した人も、「うちひしがれた」まま死去した人も、死亡日さえ不明の悲惨な人もいた。除名だけではなく刑罰を科された人も、ソ連軍事法廷で死刑判決を受け処刑のためソ連に送られた人もいた。しかし処刑は実施されず、東独法廷では死刑判決自体がなかった。

1933 年ナチ政権成立以後の彼らの活動の様子は、ソ連亡命組とは全く異なる。ソ連亡命組はスターリンと内務人民委員部等の厳重な統制・管理の中に窒息しつつも、スターリン主義に寄りそうことで生き残った(Leonhard 1955, 1992 に詳しい)。

独ソ戦開始後もマルクス・ヴォルフ一家のように恵まれた者もいたが、殆どはカザフスタンに隔離された。ソ連占領地区に KPD 支配を樹立するための先遣隊ウルブリヒト・グループの一員として帰国しながらユーゴスラビアに逃亡したヴォルフガング・レオンハルトもその一人であった。

なぜかソ連亡命中に隔離ではなく逮捕され戦後すぐ釈放されたが、ただちに流刑となりようやく 1956 年に帰国したクニプシルト (Margrit Knipschild) のケースもあった。戦前ヴォルフは彼女に夢中だったが、すでに別の亡命女性と結婚した彼は彼女の救援も帰国後の世話もせず、一度自分の部下 (スパイ) にならないかと誘っただけであり、断られた (Leonhard 1992:309,334ff.)。

他方、西欧亡命者は主にフランスとスイスで KPD 現地指導部のもとに臨機応変の創意工夫をしつつ、本来の敵であるナチズムとの闘争を展開した。

彼らの生計維持の苦勞と切り抜け策は以下には記されていないが、多くがフィールドに助けられた。それを除名者ヴァイターラーの「彼によって可能になった支援、生命と健康に感謝している」という断固とした反論 (5 節) が示した。

● パウル・マーカー (Paul Merker, 1984-1969, 図 2)

1920 年 KPD 入党、1924-1932 年プロイセン州議会議員、1927-1945 年同党中央委員・政治局員。1930 年「左翼偏向」ゆえに同党労働組合理部長解任。その後も国際的な赤色労働組合運動で活躍。1934 年フランスへ亡命、1939 年同地で抑留・逮捕、すぐ逃亡し、1942 年にはメキシコへ。同地で反ファシスト運動に従事。

1946 年帰国、SED 政治局員となるが、1950 年 8 月亡命期間中のフィールドとの緊密な関係 (メキシコへの逃亡もフィールドが支援) ゆえに SED 除名。地方の国営レストラン店長となったが、チェコスロバキアのスランスキー裁判との関連で 1952 年 11 月逮捕、シュタジ中央拘置所勾留、1955 年 3 月秘密裁判で 8 年の懲役、1956 年 1 月釈放、同年 7 月懲役を科したのと同じ裁判所の同じ裁判官が非公開裁判で無罪判決、名誉回復され、その後出版社の原稿審査係となった。

1969 年祖国功労賞受賞、しかし「彼は精神的にも肉体的にもうちひしがれて死去した」 (Baumgartner 1997: 536f.; Müller-Enbergs 2010: 873;)。

図 2 1949 年ソ連兵記念碑除幕式のパウル・マーカー



(注) ベルリン・トレプトウのソ連兵追悼碑除幕式。前列 3 人の左端がマーカー、右隣に首相グロテヴォール。(出所 ↓)

[Bundesarchiv Bild 183-V08564\\_Berlin-Treptow\\_sowjetische Ehrenmal\\_Einweihung.jpg](https://www.bundesarchiv.de/Bild_183-V08564_Berlin-Treptow_sowjetische_Ehrenmal_Einweihung.jpg) (CC-BY-SA3.0)

● レオ・バウアー (Leo Bauer, 1912-1972)

ユダヤ人家庭生まれで家族全員を強制収容所で失った。1932 年 KPD 入党、軍事部門 (M-Apparat) 従事、翌年亡

命、プラハ、パリを経て 1940 年 7 月スイスへ。ジュネーブの銀行員を名乗った。そこでフィールドを介して OSS と接触。1942 年 10 月逮捕、1943 年 10 月証明書偽造やスパイ活動、中立侵害で 2 年半の有罪。1944 年 5 月保釈され、1945 年 7 月帰国、「ソ連秘密情報機関の秘密協力者」になる。1945-1949 年 KPD 西独ヘッセン州指導部書記や同州議会議員など。

1949-1950 年ドイツ放送編集長。1950 年 8 月 23 日 [たぶん 24 日の誤記] フィールド関連と「階級敵への広範な支援」ゆえに SED 除名、国家保安省に妻と子ども逮捕され留置、1951 年 8 月ベルリン・カールスホスト [ソ連占領軍軍政部所在地、補注 3 参照] のソ連国家保安省刑務所に移され東独とソ連の尋問官による拷問。1952 年 12 月ベルリンのソ連軍事法廷で「米国スパイ」として死刑判決、翌年 1 月ソ連に送られ処刑を待つ。1953 年 6 月シベリアでの強制労働 25 年に減刑された (下記のエリカも同様)。

1955 年 10 月西独とソ連との捕虜送還協定に基づき西独に釈放されたが、そこで数か月米国 CIA の尋問を受けた。

1956 年 SPD 入党、雑誌社で働いたあと 1960 年代半ばから [まもなく西独外相、次いで首相になる] ブラント (Willy Brandt) の助言者グループに加わり、1969 年からその外交顧問 (東方政策・ドイツ政策担当) になった。1968-72 年 SPD 系の雑誌「新社会」(Die Neue Gesellschaft) 編集長。重い収監時後遺症のため 1972 年死去 (Müller-Enbergs 2010:72f.)。

● ブルーノ・ゴールトハマー (Bruno Goldhammer, 1905-1971)

ドレスデンのユダヤ人家庭 (父は繊維商、映画館所有) 生まれ、1922 年共産主義青年同盟 (KJV) と KPD に入る。

1923 年 KPD ドレスデン地区政治指導部員、翌年ユダヤ教区脱退、1924-1930 年 KPD 東ザクセン地域指導部員。その間ドレスデンやケムニッツで KPD 地方機関紙編集長、1930 年「反逆罪準備」で禁固刑 1 年、1932-1933 年軍事機密漏洩ゆえ勾留と裁判、非合法活動を経て 1933 年 2 月チェコスロバキアのホムトフに逃亡、翌年プラハに移り KPD の同国亡命者指導部員。

1935 年ブリュッセルに移りコミンテルン通信「展望」(Rundschau) の編集に従事。翌年チューリッヒで労働組合亡命者として承認され、同市の博物館協会職員となり。同時に KPD 南部指導部員、非合法紙「南ドイツ情報」(1938 年から「南ドイツ人民の声」に名称変更) 編集長。亡命党員のドイツ投入論争 (5 節参照) に関与。

1939 年からフィールドと私的接触。1940 年 7 月チューリッヒで逮捕、収容所に抑留。1944-1945 年スイスで発行の雑誌「自由ドイツ」編集長。

1945 年帰国し 6 月 KPD ミュンヘン書記 (アジテーション担当)、「ミュンヘン SPD-KPD 行動共同体」共同設立。1945-1947 年 KPD バイエルン第 2 書記、「バイエルン人民の声」編集長。1946 年 2 月ベルリンでの KPD 党協議会参加、それが「非合法地区越境」に当たり米国軍事法廷で 4 か月の拘留 [「地区」は四大国のドイツ占領地区分を指す]。

1947 年 1 月ベルリン移転、4 月まで党大学ジャーナリスト教育課程教師とソ連占領地区中央国民教育局職員。OdF (ファシズム犠牲者) として同年 2 月承認。その後 [マルクス・ヴォルフのいる] ベルリン放送報道番組責任者、1948-1949 年同放送編集長、1949 年同放送支配人代理。

「イデオロギー的注意深さの欠如」により SED 中央委員会から叱責。その後情報局メディア部長代理など。

1950 年 8 月 24 日「フィールドとの結び付きおよびそれに関連したブダペストでのライク裁判における証言」ゆえに SED 除名と逮捕。ハンガリー当局が彼の引き渡しを要求したが、東独が拒否した。

国家保安省の拘留所に勾留後、1951 年 4 月から東独内のソ連施設に拘禁され、1953 年半ばに国家保安省に戻され、翌年 4 月東独最高裁により「いわゆる“エージェント活動”」で 10 年の有罪判決になった。ファシズム犠牲者資格も 1951 年 3 月剥奪された。

1956 年 4 月まで服役後釈放、同年 6 月からドレスデンの出版社 *Zeit im Bild* [当初旬刊、のち週刊のイラスト誌] 編集部勤務、同年 10 月公的な名誉回復。1958 年反ファシスト闘士メダル授与、1959 年同出版社の SED 組織指導部員。1970 年祖国功労賞、1971 年(死去)まで同社後継者育成責任者であった (Müller-Enbergs 2010: 403f.)。

●以上の パウアーとゴールトハマー について、事件当時ベルリン放送に勤務していたマルクス・ヴォルフ (のちに東独スパイ部門責任者) は、「私はシュミット、およびパウアーやゴールトハマーの徒党 (Bauer-Goldhammer-Clique) の有害な方針と闘った」と自身の履歴書に記した (Fricke 2003:287)。

このうちシュミット (Heinz Schmidt, 1906-1989) は、1926 年 SPD 入党、1931 年 KPD に転じ、1933 年国内での非合法活動により 1934 年懲役 3 年、出所後チェコ経由で英国に亡命 [クチンスキーと同じ]、現地の KPD に属し 1941 年から同指導部員。1943-1945 年ロンドンの雑誌「自由演壇」(Freie Tribüne) 編集長。1946 年帰国しベルリン放送支配人。1949 年 10 月 20 日 [東独版フィールド関連粛清の 10 ヶ月前] の政治局決定により「民族主義的傲慢」と「不十分な政治的注意深さ」ゆえに支配人罷免となった (Müller-Enbergs 2010:1155)。

ヴォルフの回想記 (Wolf 1997) にはベルリン放送時代の記述もあるが、これら 3 人に全く触れていない。

●ヴィリー・クライケマイヤー (Willy Kreikemeyer, 1894-1950?) 死亡日さえ不明で最も悲惨な最期)

1913 年 SPD 入党、1913-18 年徴兵、1918 年 USPD (独立社会民主党)、1920 年 KPD 入党。1922 年から KPD マグデブルク地区指導部員。1924 年から主に北バイエルン、メクレンブルク、ハノーバー、ダンチッヒで KPD 専従幹部。1928-1933 年ミュンツェンベルクの下で「新ドイツ出版社」の経営に当たる。

1933 年ミュンツェンベルクの委託と KPD ベルリン指導部の同意のもとにスイスへ。そこで逮捕、追放され、ザール地方やパリを経て 1936 年非合法にドイツへ戻ったあと、スペイン内戦に参戦、1937 年国際旅団の第 XI 旅団エドガー・アンドレ大隊大佐・政治コミッサールとなり、重傷を負う。その後国際旅団全体の人事部長副官となった。

[原文は「エドガー・アンドレ大隊の第 XI 旅団」と誤記。アンドレ大隊はドイツ・オーストリア人の大隊。第 XI 旅団にはフランス・ベルギー人のパリ・コムニオン大隊、ポーランド人のドンブロフスキ大隊も所属した。]

1938 年 KPD 中央委の委託でルクセンブルクへ行き、ドイツ向け非合法出版物の制作・送付、1939-1940 年フラン

スで抑留、KPD 幹部の逃亡援助に従事した。1941 年 10 月から KPD の委託で USC 責任者フィールドとの連絡係になる。1944 年 2 月から 1946 年までパリの亡命者協会責任者。

1946 年帰国、OdF (ファシズム犠牲者) に登録。同年 3 月からドイツ帝国鉄道 (Deutsche Reichsbahn, 略称 DR) のソ連占領地区内の幹部、1949 年 1 月同総裁 (Generaldirektor) になる。

フィールド事件に関連して 1950 年 8 月 24 日中央委員会決定で SED 除名、翌日 SED 中央党統制委員会 (ZPKK, 以下統制委員会と略記) の提案で国家保安省 (略称シュタジ) が逮捕、大臣代理ミールケ (Erich Mielke, 1907-2000) が自ら尋問した。

[ミールケ (1927 年 KPD 入党) も 1936 年 9 月からスペイン内戦に参戦し、第 14 旅団参謀部大佐・作戦部長など、その後 KPD フランス亡命指導部員であった。彼はすでに 1931 年ベルリンで警官を殺害後ソ連に逃亡し、そこで軍事教育を受けた (Müller-Enbergs 2010: 883)。]

1950 年 8 月 31 日ベルリン中央区のシュタジ拘留所 [警察本部に同居] において自殺したとされる。しかし最初の死亡診断書は 1957 年 7 月 9 日の作成であり、死亡登録簿も墓地もない。その上彼が 1951 年にまだ生きていたとパウアーは証言する。

妻 [フランス人] は 1950 年から 1957 年まで彼の「運命の解明」を試みた [が、不明のままである]。彼女は 1955 年フランスに戻った。1957 年に統制委員会が彼の「内々の名誉回復」をしたが、対象はフィールドとの接触の非難についてのみであった (Müller-Enbergs 2010:722f.)。

de.wikipedia の彼の項に引用されたホーンボーゲン (Lothar Hornbogen) の記事によれば 1990 年に PDS (民主的社会主义党) が彼の名誉回復をした。当該 URL (ドイツの左翼党ウェブサイト内) はすでに存在せず、確認できなかった。PDS は SED の改称で、左翼党の前身の 1 つ。

●レックス・エンデ (Lex Ende, 1889-1951)

1919 年 KPD 入党、1928-30 年ドイツ帝国議会議員、1932-33 年新聞「赤いポスト」編集長など、1933 年パリに亡命、フランスの KPD 亡命者指導部員マーカ [上記] らと協力。1940 年 8 月から 1945 年にマルセイユに非合法滞在し、トゥールーズの KPD 指導部員。ここでフィールドと「時折接触」した。南フランスのレジスタンスで活躍した。

1945 年 9 月帰国。SED 成立後 1949 年 5 月まで中央機関紙 *Neues Deutschland* (新ドイツ) 編集長。「ウルプリヒトとの騒動後」1949 年秋に独ソ友好協会機関紙に転身。

フィールド事件関連で統制委員会と中央委員会特別委員会の調査・尋問を受け、1950 年 8 月党除名、東独南部フライベルクの国営非鉄金属冶金工場へ左遷。翌年心臓麻痺で死去。1989 年 11 月 29 日 統制委員会によって名誉回復された。 (Müller-Enbergs 2010:287f.)

●マリア・ヴァイターラー (Maria Weiterer, 旧姓 Tebbe, 1899-1976)

エッセン (西独地域) 生まれ、そこで 1921 年 KPD 入党、上記のエンデの速記タイピストでもあった。その後ベルリンやルール地区の KPD 幹部、赤色婦人少女同盟 (RFMV) 幹部、1928 年 KPD 中央委労組部員や KPD ベルリン・シャルロッテンベルクなどの幹部と務めた。

ナチ政権下 1933 年 9 月逮捕、1934 年ソ連、1936 年スイスへ、そこで KPD 南部地区指導部員、同年逮捕されフランスに追放、そこで KPD 亡命者指導部社会委員会委員など、1940 年からボンパール、次いでマルセイユの収容所に抑留、その際フィールドと接触。逃亡して非合法にジュネーブへ、そこでエンゲととともに KPD 亡命者の保護に従事。1944 年パリへ行き、フィールドのもとで USC 職員になる。

1945 年帰国後、労組や KPD の地方幹部を経て 1946 年ベルリンに移り SED 婦人局で西部地区〔西独地域〕担当、SED 幹部会婦人部共同部長、ドイツ民主婦人同盟設立に参加、同書記長。ところが 1950 年 8 月 24 日フィールドとの協力ゆえ SED およびナチ体制被抑圧者協会から除名。

〔「声明」には、彼女は「1948 年 8 月までノエル・H・フィールドと個人的な書面での連絡」を取っていたこと、また「ライク裁判によってフィールドの役割が暴露されたあと」の 1949 年 10 月 23 日に統制委員会に、「…私は彼らを正直かつ誠実な人たちとして近づきになったのであり、彼らのソ連に対する彼らの熱狂が偽りだとは思わない。いずれにせよ前述の亡命者たちのうちの多くの同志たちがフィールドと彼によって可能になった支援、生命と健康に感謝している」という手紙を送ったことが記されている。

このように自らの断固とした気持ちを表明したことが「声明」の記述にあるのは彼女だけである(5 節参照)。

1950-52 年東独南部バーガ(Berga)にある国営絹織物工場 Novotex の帳簿係に左遷、1954 年 SED 復帰と党内での部分的名誉回復、1956 年完全名誉回復となった。

1956-59 年同工場党組織書記、1959-1963 年〔出版統制担当の〕文化省出版・書籍販売本部私営出版社部長、1962 年クララ・ツェトキン・メダル、1964 年祖国功労賞受賞、翌年年金生活入り(Müller-Enbergs 2010:1403)。

#### ●エリカ・グレーザー=ウォラック(Erica Glaser-Wallach, 1922-1993)

エリカ(図 3)はドイツのヒンターポンメルン〔現在はポーランド領〕で生まれ、両親とともに 1936 年スペインに亡命した。共和国軍の敗北後 1939 年フランスに逃げ抑留され、彼女は重病になった。その際国際連盟の手助けで逃亡し、ジュネーブ在住のフィールド夫妻(ノエルとヘルタ)の世話を受け、のちにその養子になった〔5 節のように、「声明」は夫妻と彼女の関係を「三角婚姻」と非難した〕。

スイスで多くの亡命 KPD 党員と接触し、「彼らが彼女を非合法党活動に利用した」。彼女自身も 1945 年同党に入り、1948 年 SED 離党まで「幹部向け機関誌“Wissen und Tat”(知識と行為)編集長」<sup>5</sup>。米軍将校ウォラック(Robert R. Wallach)と〔1948 年〕結婚。

1949 年に養父フィールドがハンガリーで逮捕されたため、彼女は「彼を探すために」東ベルリンへ行った。ところが、そこで彼女自身が 1950 年 8 月逮捕され国家保安省〔直前に誕生〕の拘置所に、1951 年 4 月からベルリン・カールスホルストのソ連軍拘置所に入れられた。同年 8 月国家保安省ホーエンシェーンハウゼン拘置所の独房に移り、ミールケの尋問を受けた。

1952 年 9 月彼女はカールスホルストに連れ戻され、「眠

らせない、寒さ、殴打の拷問」の末、軍事法廷によって死刑判決が下され、モスクワの刑務所に移送、6 ヶ月間死刑囚独房で過ごした〔上記のバウアーと同様〕。

スターリンの死〔1953 年 3 月〕のあと、ヴォルクタ収容所での 1953 年 7 月から 15 年間もの強制労働に「恩赦」され、主に鉄道建設作業をさせられた。

しかし 1955 年判決が破棄され、東ベルリンを経由して西ベルリンに移送された。但しソ連は判決破棄にもかかわらず賠償しなかった。養父フィールドは釈放後にハンガリー当局からの「金銭的賠償」を得た。

彼女は「ソ連のエージェントだとの嫌疑」のためすぐに米国に戻れなかった〔バウアー同様、西独で CIA の尋問を受けたのかもしれない〕。ようやく 1958 年非米委員会での証言後に家族のもとに戻り、亡くなるまで教師としての働いた。

(以上 <https://www.stiftung-hsh.de/geschichte/stasi-gefaengnis/haftschicksale/1950er-jahre/erica-wallach/>)

en.wikipedia によると、彼女の米国帰国に際してはアレン・ダレスが助力した。

図 3 Erica Glaser-Wallach



(注)1991 年ベルリンにて。(出所 ↓) (CC BY-SA 4.0)

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Foto\\_Erika\\_Wallach.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Foto_Erika_Wallach.jpg)

#### 5. 統制委員会(ZPKK)による「調査の結果」:経緯と罪状

ハンガリーのライク裁判とブルガリアのコストフ裁判によって、「英米の秘密情報機関がすでに第二次世界大戦中に一連のエージェントを非合法労働運動に送り込んだ」証拠が明らかになり、その中心はアレン・ダレス(Allen Dulles)を責任者とする OSS 欧州本部(スイス)であった。なお声明には「Allan Dulles」とあるが、引用時もアレンとする。

「ライク裁判で名前が挙がった」フィールドは、「スペイン内戦の終わり頃に初めて姿を現した」。

彼は米国務省職員として国際連盟国際軍事委員会に属して、国際旅団員の避難支援の名目でその名簿を入手した。彼の弟ヘルマン・フィールド(Hermann Field)も、〔ナチ占領下の〕チェコスロバキアで亡命者の英国避難を支援して名簿を手に入れた〔以下弟をヘルマン、兄ノエルを単にフィールドと呼ぶ〕。

こうして英米情報機関が「反ファシスト亡命者に関する広範な個人書類」を入手し彼らへの浸透作戦が可能になった。

1939 年秋にヘルマンがチューリッヒにいる兄にスイス共産党員ザリー・リーバーマン(Sally Liebermann)を紹介した。彼女宅にはドイツからの亡命共産党員が出入りし、そこでフィールドは「ゴルトハマーとの強固かつ永続的な結び付きを得ることによって、ドイツの政治的亡命者への最初

<sup>5</sup> 同誌の副題は「科学的社会主義の理論と実践の雑誌」であり、ボンのドイツ歴史館(Haus der Geschichte der Bundesrepublik Deutschland)の目録では 1949-1956 年、BRD(当時西独)

発行とある。西独でのドイツ共産党禁止の判決文(1956 年)には同誌掲載論文が何ヵ所も引用されている。

の侵入に成功した」。

「非常に多様な政治的亡命者グループへの彼の浸透は、常に同じやり方で行なわれた。彼が現れた場所ではどこでも、彼は迫害を受けた反ファシストの友人と言ひ繕うことに習熟していた」。スペイン内戦における国際旅団への「大きな支援についての彼の若干の簡潔な発言によって彼は即座に友人たちを得た」。

「スイスでは彼の養女と称するエリカ・グレイザーが彼の博愛さの生きた証拠として役立った」。

エリカはスペイン共和国軍を支援したドイツ人医師の娘で、「フィールドがスペインのこの寄り辺のない少女をひどい窮地から救出し、スイスに連れて来たと言われる。実際には彼女は米国人たちに雇われていたのであり、彼と彼の妻ヘルタ両方の恋人であった」。

「スイスのドイツ人亡命者たちへのフィールドの入り込みの主要責任はゴルトハマーにある」。

ゴルトハマーは、リーバーマンとエリカが「スペインでのフィールドの活動についての虚偽の話しを裏書きしたことで満足し」、確認作業を怠ったからである。しかも彼は「フィールド一家の道徳的放蕩」、つまり夫妻と養女の「三角婚姻」を知って「“ひどくショック”を受けた」にもかかわらず、「腐敗した資本家階級のこの家族」から離反せず、「嫌悪すべき三角婚姻を解きほぐそうとした」にすぎなかった。

同時にフィールドは当時のスイス共産党議長で、のちにトロツキストとして除名された「ホフマイヤー (Hofmayer)」<sup>6</sup>とも知り合った。

1941 年 2 月にフィールドはホフマイヤーの紹介で、「ドイツの女性亡命者ヒルダ・マッダレーナ (Hilda Maddalena) とマリア・ヴァイターラーの住所を得」て、彼女らと接触した。

中立国スイスは福祉団体を装った「諜報機関にとって優れた前進基地」であり、そこに「フィールドは 1940 年から米国 USC のスイス・フランス責任者として登場し」、当初マルセイユに事務所を設け、1942 年 11 月ドイツの南フランス占領後はジュネーブのホーアムート (Berta Hohermuth) 夫人率いる国際亡命者奉仕会 (Aide aux Emigrés) のオフィスに同居した。

米国籍の彼はフランスの未占領地とスイスの間を自由に行き来できたので、「スイス医療センターや米国バースキー委員会のような様々な反ファシスト援助委員会」が集めた「わずかではない額の資金」を「フランスに持ち込むことを申し出た」。フランスで彼は「この資金の出所を隠し通し」、「米国の“援助委員会”による支払いとした。こうして反ファシスト資金が「米国諜報機関」 [=OSS] の資金に使われた。

「スイスの資金も含まれるのに「米国の」と言ったという非難だと思われる。仮に事実だとしても、それだけで「OSS の資金」になったとは言えない。追加的な証拠は何も記されていない。例えば Velázquez-Hernández (2019) には USC の活動は国際赤十字や OSS の協力も得たとあるが、OSS のための偽装組織としての活動では全くなかった。」

ヴァイターラーを通じてフィールドは KPD 中央委員パウ・マーカールと知り合い、マーカールを介して「マルセイユの

共産主義亡命者指導部と結びついた」。

しかもヴァイターラーの紹介によって、フィールドは「助力を必要とする多数の反ファシストたち」 [KPD 党員亡命者] との「多くの個人的結び付きを非常に迅速に持った」。

「だから」ヴァイターラーには「南フランスのドイツの反ファシスト亡命者たちへの彼の迅速かつ妨害のない浸透の主な責任がある」。「規律のない行動」をした彼女には「階級意識も革命的な警戒心のごくわずかな痕跡も」ない。

彼女はライク裁判で「フィールドの役割が暴露されたあと」の 1949 年 10 月にさえ、フィールド夫妻が「正直かつ誠実」であり、「ソ連に対する彼らの熱狂が偽りだとは思わない」、「多くの同志たちがフィールドと、彼によって可能になった支援、生命と健康に感謝している」し、私も二人に「感謝と敬意の感情を常に持っている」と統制委員会に反論した。

「南フランスの亡命者指導部も同様に必要な警戒に欠けていた。マーカールはホフマイヤーからフィールドを“大丈夫だ”と通知されたが、マーカールも亡命者指導部のエンデ、クライケマイヤー、同志ベリンクもこれまでフィールドに関する正確な情報を収集しようとしたことがない」。

1950 年 7 月 27 日マーカールは統制委員会に、「米国共産党所属と彼の“特別任務”」についてのフィールドの話しが「フィールドの評価の際に特別の役割を果たした」と記した。彼は、そうした「フィールドのありそうもない冒険的な作り話に全く簡単にだまされたという非難を免れ得ない」。

彼は、フィールドとの関係は「ナチ軍のソ連侵攻およびそれによるルーズベルトとソ連の協力の始まりの時期の特別な状況下で、そしてフランスでもヴィシー政府とアメリカ人の対立が深まった時に生まれた」とも記した。

これは「彼らがソ連を信頼せず、アメリカ帝国主義の性格を見誤ったことを証明」しており、「ルーズベルトの進歩的な姿勢」に眩惑されて「米国务省の代理人たちを労働者階級の同盟者」と見た「重大な政治的誤り」であった。

【「ルーズベルトとソ連の協力の始まりの時期の特別な状況下」ゆえに、スターリンはコミンテルンを解散した (補注 2)。コミンテルンは世界革命成就の担い手だからその解散はフィールドとの付き合いとは比べものにならない重大事であった。だから「声明」がこの時期のスターリンを基準に判断すれば、犠牲者は無罪どころかスターリン直弟子として賛美しなければならなかった。そうはできないので、「声明」は、「特別な状況」を無視し、以下のように独ソ戦開始前という全く異なる状況下のスターリン報告にすぎる。】

彼らは 1939 年 3 月 10 日 [独ソ不可侵条約締結 5 ヶ月前] の第 18 回党大会における「同志スターリンの報告にある言葉を全く顧みなかった」:

「不干渉政策においては、侵略者たちをそのいかがわしい行為、例えば日本が中国との戦争に、もっとより良くはソ連との戦争に手を出すことや、例えばドイツが欧州問題に関わることを、ソ連との戦争に手を出すことを阻まず、すべての戦争参加者を戦争の泥沼に深く沈めさせ、ひそかにそれらを拍車をかけること、それらが互いを弱め、疲れさせるようにし、その後、それらが十分に弱体化した時に、むろん弱体化した戦争参加者

<sup>6</sup> Hofmayer ではなく Karl Hofmaier である。スイス共産党は非合法化されたあと 1944 年に社会民主党の一部とともにスイス労働党結成。ホフマイヤーはその書記になったが、党の資金横領

で 1947 年除名された (<https://pda.ch/geschichte-pdas/>; <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/024671/2007-12-18/>; [https://de.wikipedia.org/wiki/Kommunistische\\_Partei\\_der\\_Schweiz](https://de.wikipedia.org/wiki/Kommunistische_Partei_der_Schweiz))。

に諸条件を押しつけるために、フレッシュな力をもって舞台に登場するという努力、願望が顕著である」(スターリン 1950:692 を参考に一部変更)。

〔引用文にはないが、「侵略国」として「日本、ドイツ、イタリア」、「不干涉政策」の担い手として「非侵略国の大多数、とりわけ英仏」を指し、不干涉を決め込む目下の「非侵略国」(英仏等)も戦争拡大によって自己利益を凶ると見ていた。

斎藤(1995:102-3)も要約・引用し、この「スターリン報告がドイツよりも英仏の「非侵略国家」の方をより多く非難しているかどうか」について、「侵略の“黙認”と言っており、“宥和”という言葉は使っていない」ので「私は、否、と答えた。

しかしこの報告はすぐ続けて「ドイツを例にとつて」次のように断言した(スターリン 1950:693-694)：

英米の新聞雑誌は「ドイツ人をもっと東の方に」向けるために、ソ連軍の脆弱さやドイツ人がウクライナなどに向かいつつあると宣伝し、「ドイツにたいするソヴェート同盟の憤激をたかめ、雰囲気毒を、はっざりした根拠もなしに、ドイツとの紛争をおこすように煽動」していると批判した。

「欧米のある政治家と新聞記者たち」が暴露した「不干涉政策の真の内幕」によれば欧米はチェコの一部を「ソヴェート同盟と戦争をはじめる義務をおう代償として」ドイツ人に与えた。しかし「ドイツ人は、いまや、この約束手形をしはろうことを拒否」した。

従ってスターリンはこの報告では、斎藤の解釈と異なり、「ドイツよりも英仏の“非侵略国家”の方をより多く非難」した。

その意味では「声明」が英米帝国主義への警戒の根拠として上記引用句に飛び付いたのは理解できる。しかしその1年後にはスターリンは英米と「連合」し(いわば帝国主義を含む「人民戦線」)、事態が一変したことを「声明」は全く無視し、英米の帝国主義性を強調して粛清を合理化した。「声明」の引用句のすぐあととして上記に追加したの文句はなおさら「声明」には不都合である。従って「声明」はこのスターリン報告を引用すべきではなかった。

なお斎藤(1995:97)によれば、モロトフは 1939 年 8 月 31 日ソ連最高会議で「スターリンは、そのとき〔第 18 回党大会〕すでに、独ソ間の非敵対的で善隣的な関係の可能性について、問題を提起したのである。ドイツがこのスターリン報告を正しく理解して、ここから実践的な結論を引き出してくれたことは、今日明らかである」と発言した。

このモロトフ発言を斎藤は直前に締結した「独ソ不可侵条約の起源」をスターリンに求めるためであり、それ「によってのみスターリン報告を評価することは妥当ではない」と批判したが、上記のようにモロトフ発言は誇張してはいるが、スターリン報告の本質に当たっている。

実はスターリンの忠実な盟友モロトフは、ヒトラー政権誕生 11 ヶ月後の 1933 年 12 月 28 日にもソビエト最高会議で「ドイツとの関係は、つねにわが対外政策中できわだった

位置を占めている...ソ連としては、その対独政策を何ら変更する理由をもっていない」と発言した(クリヴィツキー 1967:12)。

フィールドが USC として活動し始めた時期はこの「言葉」とはまるで異なる世界情勢になった。1939 年 9 月にはナチとの合意(=独ソ不可侵条約秘密議定書)のもとソ連自身がポーランドなどへの「いかがわしい行為」に走り、英仏が参戦し、1941 年には武器貸与法(3 月)と、独ソ開戦(6 月)、日米開戦(12 月)により米国も「不干涉政策」を停止し英仏ソ等との「連合国」として参戦した。

従ってこの「言葉」はフィールド関連粛清の援用には適さない。「声明」はおそらくその後のスターリンに適切な言葉が見つけられず、しかしスターリン引用は必須ゆえ、英仏批判のこの「言葉」を使用した。

米英などと「連合」して以後のスターリン自身の考えは、上記のように連合国への配慮によるコミンテルン解散に如実に現れた。コミンテルン執行委員会幹部会や下部組織共産主義青年インターナショナル書記局の公式発表にある解散理由は建前である。スターリン自身がロイター通信に端的な理由を回答した。それによれば、コミンテルン解散は他国の「ボルシェヴィズム化」を意図しているという「嘘を暴露」し〔実際はその意図を隠蔽〕、反ファシスト闘争に「党派や宗教的信念に関係なく」「すべての自由を愛する諸国民」を結集するためだとあった(全文は補注 2)。

フィールドもその「諸国民」の一員であった。粛清犠牲者たちは、こうした情勢下のフィールドとの協力の何が問題かと反論したかっただろう。彼らは当時亡命先でロイターのこの記事を読んだかもしれない。だが「声明」に取り上げられた限りでは、フィールドを擁護して統制委員会に断固反論したのはヴァイターラーだけであった(4 節)。

「第二次世界大戦勃発の際にかなりのドイツ人亡命者の間では政治的イデオロギー的な逸脱が露出し、それが帝国主義のエージェントの宣伝活動への彼らの抵抗力をなくした。「逸脱の本質」は、一方では「指導的進歩勢力としてのソ連」と「労働者階級力」への「信頼の欠如」、他方では「帝国主義の反動的性格の誤認」であり、それが「トロツキストの立場」(「ベルツ<sup>7</sup>やマーカーその他」)、または「1939 年の独ソ条約締結を理解せず、ソ連に対する帝国主義のトロツキー主義的エージェントの中傷にだまされた」立場(「マーカーやレックス・エンデその他」)である。〔奇妙にも、マーカーはトロツキスト兼トロツキストにだまされた者にされた。〕

「これらの重大な政治的逸脱によって彼らは階級の敵の道具になった」。それは「フランス共産党の反ファシスト抵抗闘争に対するマルセイユのドイツ亡命者指導部の行動にはっきり示された」。

南フランスのドイツ亡命者指導部代表・同志ベリンクは 1940 年末に、ドイツ兵への宣伝工作についてフランス共産党と合意した。同志スターリンが「10 月社会主義革命勝利 24 周年記念演説」(1941 年 11 月 6 日)で指摘したように、特にヒトラーのソ連侵攻開始(1941 年 6 月)後に〔独ソ戦線

4 月にパウアーが紹介とある〕。1945 年 7 月帰国、司法管理部副長官となったが、KPD と SPD の合同に反対し 1946 年 3 月解任、交通管理部の工場部長などを務めた。フィールドが CIA〔当時は OSS〕エージェントとして東欧諸国の見せしめ裁判のキーパーソンにされた時、ベルツは裁判を恐れて自殺した(Baumgartner 1996: 54f.)。

<sup>7</sup> ベルツ(Paul Bertz, 1886-1950)は「声明」4 ヶ月前、4 月 19 日に自殺。彼は 1919 年以來の KPD 党員で、1924-1930 年帝国議会議員、1925-1935 年 KPD 中央委員ないし同候補、非合法活動後 1934 年スイスへ亡命、ドイツ向け非合法工作を担当、1939 年フランスで抑留、翌年スイスへ逃亡。1944 年に自由ドイツ同盟やドイツ国内工作強化についてスイスの KPD 公式指導部と決裂した。フィールドとはこの時期に接触した〔下記には 1941 年

の負担軽減のために]第二戦線での抵抗運動が、従ってまたこの合意がより重要になった。

だから上記合意[によってドイツ軍を第二戦線に縛ること]は「国際的な連帯の行為であっただけでなく、ドイツ国民の国家的利益にもなった」。他方、第二戦線形成によって「ソ連・ドイツ戦線の負担を軽減することは英米帝国主義の計画にはなかった」だけではなく、フランスなどでの「抵抗運動の展開にもブレーキをかけ」、上記の「合意の実行を妨害するために、彼らのエージェントであるノエル・H・フィールドを通じてドイツ亡命者指導部に影響を及ぼした」。

フィールドの任務はドイツ軍を「第二戦線」(西部戦線)よりも対ソ戦線に向けることにあった。

彼は資金提供によって「ドイツ亡命者の中での大きな信頼基盤を形成し」、「1941 年の秋までにすでに非常に深く浸透したので、彼をスイス内のドイツ亡命者指導部が南フランスへのクーリエとして利用した」。

その際、「この間に亡くなった[元]帝国議会(KPD)議員ベルツ(Paul Bertz)と、今では長年の米国のエージェントとして暴かれたレオ・パウアーが、パウル・マーカールへの伝達のための党内要件をフィールドに口述筆記させ」、パウアーは「レックス・エンデとマリア・ヴァイターラーの同意のもとに 1942 年 1 月から同じ方法を[クーリエとして]利用した」。

「それ以後」スイスではその方法が続き、マルセイユではクライケマイアーが同様に実行した。

こうして「マルセイユのドイツ指導部は非常に強くフィールドの政治的影響下に陥っていたので」、北フランスでの抵抗運動強化のためのドイツ亡命者の動員強化についてのフランス共産党の要請決定伝達を疑わしいとして無視し、マーカールはメキシコに逃げ、エンデは「公然たる裏切りに移行した」。すなわちエンデはクライケマイアーの助けを借りて上記合意のテキストをベルツに渡すことをフィールドに委託した。そのため OSS がこの抵抗運動強化策を知った。

「パウアーの了解のもとにベルツとフィールドによって」フランス共産党の決定拒否の「方向」が取られた。

これは「アメリカ帝国主義の政策にかなっていた」。彼らの政策はドイツ軍を対ソ戦線に向けることであり、「フランスにおける反ファシスト抵抗運動の拡大に興味がなかった」。

こうして「レックス・エンデ、ヴィリー・クライケマイアー、パウル・ベルツ、レオ・パウアー、パウル・マーカールはアメリカ帝国主義者の命令に従い、反ファシスト抵抗運動の展開を妨害した」。

エンデとクライケマイアーはドイツ亡命者に「フランス共産党中央委員会の決定を知らせず、意図的に彼らにその闘い[参加]を思いとどませた」。

クライケマイアーは抵抗運動に参加するつもり「反ファシストたちに、彼らが逃亡したフランスの強制収容所に戻るように忠告した」。実際には「少なくないドイツ亡命者」が「Maquis」(マキ、フランスの対独レジスタンス組織)に参加したが、それによって彼の「裏切りが軽減されることはない」。

エンデは、ある同志が抵抗運動に参加するのを、「君は

いわゆる決定に対する我々の立場を知っている」などと言って、参加を思いとどませた。「[上記にはフランス側の「決定を知らせず」とあるのにここでは決定が知られている。]

「同志ベルンク」は決定通知時点には留置中だったが、釈放後も「エンデとクライケマイアーのサボタージュを防ぐことを控えた」ので、「厳しい非難が該当する」。

「スイスで 1944 年に同じ裏切りが繰り返された」のだから、「ドイツ亡命者指導部のそのような態度」は「偶然」でも「政治的なあいまいさの結果」でもない。

スイスでは「政治的亡命者」が少ない上に「ほぼ全て」が抑留されていたので、その存在は「南フランスにおける強力な亡命者たちよりも影の薄いものであった」。だからフィールドは自分の結び付きをゴルトハマーに限定し、彼を通じてエリカを「亡命者たちに入り込ませた」。

フィールド自身もゴルトハマーを介して同志トイプナーに接触した。トイプナーがゴルトハマーを、「ドクター・ホフマン」という名前でチューリッヒの施療院で働いていた[ハンガリー人]ドクター・ティボール・スーニイ<sup>8</sup>に引き合わせた。

「フィールドはこの結び付きの助けを借りて、ドイツの共産主義亡命者グループの政治的崩壊に努め」、スーニイが「フィールドの委託でオーストリア亡命者グループを通じて、労働者の裏切り者で元米共産党議長ブラウダー(Earl Browder)の[共産主義と資本主義の共存]理論を広めた」。

当時 KPD 中央委員だったベルツは 1940 年フランスの収容所から逃亡しパウアーとともにスイスへ行った。パウアーは「スイスと南フランスの間の連絡手段設定の任務を与えられていた」が、実行不可能性を「口実」にその任務をフィールドに委ねた。パウアーは「1941 年初め以来」フィールドやエリカと「恒常的な結び付きにあった」。

パウアーは 1941 年夏にベルツにフィールドを紹介し、二人はフィールドから「継続的に資金援助を受け」、彼に「党内のすべての要件を打ち明け」、彼を「南フランスへのクーリエとして利用した」。彼は「ベルツの政治顧問」になった。

「フィールドとゆるい結び付きにあり資金援助を受けていた[にもかかわらず]ドイツ亡命者指導部は、スイスで 1944 年秋に、ドイツ亡命者を[反ナチの]非合法活動のために南ドイツに送る決心をした」。ところが「ドイツとの国境連絡路についてフィールドに詳しく知らせていたベルツはこの計画に反対し」、同指導部と「決裂した」。

そこでフィールドは同指導部への従来からの資金援助を今後は「ベルツを通じてのみ」と脅したが、和解不成立を見越して彼は同指導部に「OSS の別のエージェントグループを近づけた」。彼はヴァイターラーを介して同志ラングホフと結びつき、ラングホフが同指導部と OSS のエージェントかつアレン・ダレスの直接の協力者であるクラーク(Clark)を結び付けた。

「クラークとフィールドは外見上は互いに独立に、しかし実際は合意の上で、ファシズムの崩壊後ドイツ亡命者の帰国に資金を提供した」。「その際彼らは今後の活動のために」帰国後の「元ドイツ共産党亡命者の今後の就労場所の

<sup>8</sup> スーニイ(Tibor Szönyi)は帰国後党本部勤務、中央委員。スイス在住のハンガリー国防省諜報部員エドモンドの「戦中・戦後の亡命ハンガリー人の動向」通報の中に、1945 年 1 月 6 日スーニイらが「ユーゴスラヴィア共産主義者から取得した偽の軍医証明書を使って」ペオグラード経由ハンガリーに入った」とあった。その

ため「スーニイ派は、“アメリカ帝国主義とユーゴスラヴィア修正主義のスパイ”と決めつけられ」、彼は 1949 年 5 月 11 日逮捕され、年 9 月 24 日ライク・ラースローやサライ・アンドラーシュとともに死刑判決、翌月 15 日絞首刑となった(盛田 2020:273,284)。

正確な知識を入手した。「ベルツ周辺の小グループ」にはフィールドが資金提供した。

「アレン・ダレスとクラークは亡命者指導部を通じて亡命者たちの大部分に資金提供し、そのため「同志トイプナーと同志フーアマンに何回かの分割払いで受領書と引き換えに 1.3 万スイスフランと 1 万 ライヒスマルクを支払った」。

「資金受領の際に同志トイプナーと同志フーアマンは自身の政策を実行することと政治的任務を引き受ける用意がないことを言明した」。しかし「実際にはフィールドの政治的分解工作」の結果、「彼らは自発的にアメリカ帝国主義の路線に頼り、その役割も誤解し、ゴールトハマーとともに、「米国スパイ機関…のエージェントたち」を「ドイツ民主化を促進することができる同調的な進歩勢力」と位置づけた。

「これらの同志たちの提案でフィールドのいわゆる養女エリカ・グレーザーが信頼できる人物として OSS 機関に正式に組み入れられた」。また「同志フーアマン」は、OSS がスパイ組織で、「主に SPD 右派やトロツキストたちとともに活動した」と分った 1945 年夏に、「米国エージェントたちとの協力のための特別な理論を作成した」。

これは「裏切り者ティボール・スーニイと同じ路線」である。スーニイは裁判所での尋問に「我々は戦後に米国諸機関と協力する気があるし、それを必要と思う」との「覚書」を作成したと供述した。また「同志フーアマンとゴールトハマー」はライク裁判の結果を受けて「共犯者の 1 人ティボール・スーニイを助けようと試みた」。

「フィールドとスイス在住のドイツ亡命者たちの協力はすでに 1944 年末頃に反ソビエトの性格を持った」。それを示すのは、彼が 1944 年末から組織し翌年 2 月開始した「社会福祉スタッフ講習会」である。

その内容は、彼の盟友である上記のホーアムート夫人の「全国社会事業会議」(1944 年 4 月 19 日)での研究報告「戦争被災諸国のためのスイスの戦後援助」に基づいた。

彼女はそこで、ソ連は「ドイツファシズムがソ連に犯したのと同じ犯罪」を犯したと批判した。このような「反ソビエトプログラム」にもかかわらず「ゴールトハマーとその妻、同志トイプナーがこの講習会に参加した」。

南フランス解放後フィールドはスイスをクラークのグループに任せ、パリに USC 事務所を、マルセイユとシャンベリに支所を設けた。彼は USC「欧州ディレクター」になり、パリ事務所を、ミュンツェンベルクの元秘書で「トロツキストのヘルタ・ユル・テンピ (Hertha Jurr-Tempi)」に委ねた。

パリ事務所職員にはフィールドが「1942 年秋にマルセイユからジュネーブに連れてきたマリア・ヴァイターラーを当てた。彼女は彼を神の如くあがめていた。彼女は KPD 亡命者の登録を担当し、「クライケマイヤーと共同でフィールドのために有用な住所資料を完全にした」。

マルセイユでもパリでもクライケマイヤーは亡命者支援金の「領収書付き決済リスト」をフィールドに渡した。ライク裁判でスーニイは、「彼のエージェント組み入れの際に」その領収書を「アレン・ダレスが突きつけた」と証言した。

「拷問を受け続けたフィールド」は「面識のないライクの写真を見て、「見たことがある」と自白した」(盛田 2020:278)のだから、スーニイのこの「証言」も、脚本通りになるように拷問によって押しつけられた可能性がある。) ]

フィールドは戦後 1945 年夏にメキシコに出向いてマー

カーと接触したあと、ドイツに戻り、「Cralog 将校」の制服を着て各地を回った。その一部にエリカと USC パリ事務所長テンピが同行した。エリカは当時「ゴールトハマーと同志トイプナー、同志フーアマンの了解のもと」OSS の〔西独〕ヴィースバーデン事務所で働いていた。

この時フィールドは米国からの「救援小包」(Care-Paketen)配布を「FDGB 分裂の準備」に役立てた。

〔CRALOG は戦後占領下のドイツで救援活動をしたドイツ内認可救援機関協議会(米国 NGO)を指す。Care-Paketen は、CARE(米国 NGO のヨーロッパ向け救援物資発送協会)が送った小包だろう。FDGB(自由ドイツ労働同組合同盟)はソ連占領地区(東独)労組の全国組織。〕

フィールドはさらに「SED 幹部の分解のために同じ方法を利用」しようとして「何度もファシズム犠牲者のリスト」〔4 節にある OdF のリスト〕を SED 中央書記局に問い合わせたが、拒否された。そこで彼は「捏造電話」で「ファシズム犠牲者委員会」から 25 名のリストを入手した。

彼はドイツ各地での接触や文書連絡を「1949 年の春まで」続け、またエリカのライプツヒヒ大学就職を試みた。パウアーとマーカーもエリカやその夫〔米国人ウオラック〕、フィールドのソ連占領地区での就職に努力した。

「したがって統制委員会による調査の結果は、ノエル・H・フィールドとの多くの同志の関係は慈善問題だけに限定されないということであった」。

まとめると、ゴールトハマー、ヴァイターラー、クライケマイヤーは「フィールドが多数の亡命者と個人的知り合いになることを広範な方法で助けた」。

エンデ、パウアー、ベルツ、ヴァイターラー、クライケマイヤー、マーカー、同志ベリンクは「フィールドに自ら党内要件を知らせたか、または知らせることを黙認した」。

ゴールトハマー、パウアー、同志フーアマンと同志トイプナーは「すでにスパイ組織としての OSS の性格を認識しながら、この機関との協力を決意した」。

クライケマイヤー、ヴァイターラー、ベルツ、パウアー、マーカーは「ファシズムの崩壊後もなお長くフィールドとの関係を維持した」。

パウアーとマーカーは「1948 年に当時のドイツの諸占領地区におけるフィールドの職のために尽力した」。

「ゴールトハマー、クライケマイヤー、ヴァイターラーは、またある程度は同志ベリンクは、「諸関連を疑いの余地無く明らかにするために党に手を貸さなかった」し、ライク裁判のあとも促されるまで「フィールドとの彼らの関係を党に党に知らせなかった」。彼らは「すでに証明され得たことしか」認めず、「常に彼らの曇った記憶を引き合いに出し、フィールドとの協議の内容について不完全な申し立てをした」。

このような「党の前での彼らの沈黙は、不誠実さ、党への信頼の欠如、党との結び付きの不足の証拠であった」。「党の指導的職務にあった人々がノエル・H・フィールドのような階級敵の輩にだまされたのはなぜか」。

「その原因は、すでに触れた理由に加えて、彼らの社会的出自に照応する小ブルジョア的イデオロギー」にあり、「それが彼らのうちの大部分にあつては 1933 年以前でさえ政治的な動揺に導いた」。

(補注 1) 独ソ不可侵条約秘密議定書

1) 内容

独ソ不可侵条約とその秘密議定書の内容はすでに周知であるが、要約することにする。

それは 1939 年 8 月 23 日締結され、翌日ソ連共産党機関紙プラウダ第 1 面が図 4 (の赤枠) のように、署名関係者の写真とソ連側公式発表、ロシア語条約文を掲載した。むしろ秘密議定書は掲載されなかった。

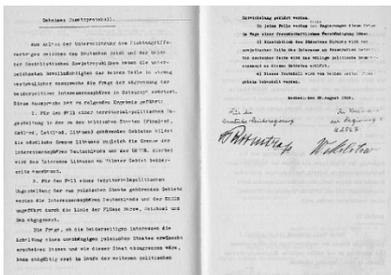
図 4 独ソ不可侵条約締結を伝えるソ連共産党機関紙プラウダ(1939 年 8 月 24 日)



(注) 写真右からソ連外相モロトフ、同書記長スターリン、ドイツ外相リッペンロップ、同条約局長ガウス。写真の下に「8 月 23 日午後 3 時 30 分、ソ連外務大臣モロトフ同志とドイツ外務大臣フォン・リッペンロップ閣下が第 1 回の会談を行なった。その会談にはスターリン同志とドイツ大使シューレンブルク伯爵が同席した。会談は約 3 時間続いた。しばらく休んだ後、会談は午後十時に再開され、不可侵協定を調印して終了した。不可侵協定の内容は次のとおりである」との公式発表があり、その下にロシア語条約文がある(レオンハルト(1992:冒頭の写真,14) (赤枠は青木)。

同条約秘密追加議定書(図 5、以下秘密議定書と略記)の冒頭に、「両国全権代表は厳秘の意見交換において東欧における両者の利益圏(Interessensphären)の明確化の問題を論じた。意見交換は以下の結論に達した」とある。「Sphäre」自体に勢力圏の意味もある。

図 5 独ソ不可侵条約秘密議定書



(注)「この写真は 1946 年にニュールンベルク裁判でのリッペンロップとゲーリングの弁護人によって作成された」(下記出所)。なお朝日新聞(1989.6.17)には「戦後、米国が押収したドイツ外務省保管の公文書の中から発見され、初めてその全容が明らかになった」とある。ソ連は当初モロトフの署名がラテン文字であることを理

由に「偽物」と退けた(斎藤 1995:25)。署名の際の手書き肩書きもドイツ語である。おそらくドイツ語正文にはそのようにしたのだろう。

(出所↓)(Public domain)  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tajny\\_protokol\\_23.08.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tajny_protokol_23.08.jpg)

図 6 ポーランドの独ソ分割図



(注) 黒色点線=当時のポーランド領、赤色点線=秘密議定書分割線、赤色実線=実際の独ソ分割線。(出所↓)(CC-BY-SA.4.0)

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Occupation\\_of\\_Poland\\_1939-es.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Occupation_of_Poland_1939-es.svg)

その合意内容は:

- ①「バルト諸国」(バルト三国とフィンランドを指す)については「リトアニアの北部国境が同時にドイツとソ連の利益圏の境界」(以北がソ連)、但しリトアニアの「ビリニユス地域への利益関心は双方」。
- ②「ポーランド国家に属する地域」については「おおよそピサ川、ナレフ川、ヴィスワ川、サン川のラインによって区切り(以東がソ連、図 6 赤い点線)。ポーランドの独立維持かどうか、その場合どう区切るかは「友好的な合意を通じて」、「今後の政治的発展の経過の中で最終的に解決され得る」。
- ③「ヨーロッパ南東部」についてはソ連が「ベッサラビアへの利益関心」を強調しドイツがそれへの「無関心」を言明した。

実際のポーランド分割は②よりも東側(図 6 赤い実線)になり、新国境線沿いのブレスト・リトフスク(1941 年 6 月独ソ戦開始地点)では、独ソによるポーランド分割完了の 1939 年 9 月 21 日に両者の「勝利の合同閱兵式」が行なわれた(リード 2001:訳者解説)。

同訳者解説には日本との関わりも記された: ソ連のポーランド侵攻開始が 1939 年 9 月 17 日になったのは、前日に「ノモンハンで日ソ停戦が成立して、極東での日本の脅威」が避けられたと「スターリンが確信したからだ」。他方日本では「平沼首相は独ソ不可侵条約が我が日独防共枢軸強化方針を裏切り帝国外交政策に対し重大な結果を及ぼしたことに輔弼の責任を痛感し、この責任をとって総辞職」した。にもかかわらず「1940 年 9 月 27 日には日独伊三国同盟が締結される」ことになった。

斎藤(1995:第 4 章)もノモンハン事件との関係を論じた

交渉経過や当時の独ソそれぞれの事情などはリード (2001) や斎藤 (1995) 参照。

## 2) スターリンによる隠蔽と露見

スターリンはこの秘密議定書が暴露されないと考えたのか、1946 年 3 月に「ドイツ人はフィンランド、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、ハンガリアをつうじてソ同盟を侵略した」、「そこにソ連を敵視する政府が存在したからこそ、ドイツ人はこれらの国をつうじてその侵略をおこなうことができた」、その結果「およそ 1700 万の人をうしなった」、だから「ソ同盟が将来におけるその安全保障をのぞんで、これらの国がソ同盟に誠実な態度をとる政府をもつようにつとめている事実、いったいどんなおどろくべきことがあるのか、ききたいものである」と、平然と歪曲の強弁を展開した (スターリン戦後著作集 1954:41)。

この発言と 2022 年 2 月のロシアのウクライナ侵攻の際のロシア大統領プーチンの言い分の類似性が鮮明である。彼は KGB で徹底したチェキスト教育を受け、その頭はいまもそのままのだろう。

1948 年にはこの議定書の「存在と全貌」がドイツ語正文のマイクロフィルムによってはじめて知られた (図 5)。原文は外相リップントロフが焼却させた。

それでもソ連はその存在をあくまで認めず、「西側向け「新思考外交」を推進した」ヤコブレフも「同議定書とバルト三国併合とは直接関係はないと強弁した」。ようやく 1995 年にロシア語正文が公開された (リード 2001: 訳者解説)。

バルト三国の問題提起を受けてソ連の人民代議員大会も秘密議定書問題を取り上げた (朝日新聞 1989.6.17)。

西独公文書館から秘密議定書コピー (だぶん 図 5 と同じ) がイズベスチャ紙記者に送られ、それが「部数 2000 万部を超える最も人気のある週刊紙「論拠と事実」に掲載され」、ソ連での「初公開」となった。ヤコブレフは「ここ数カ月の間に明るみに出た文書などを含めて判断すると、この秘密追加議定書が存在したことに疑問を挟む余地はない」と認めた。ただし「原文はソ連側でも西側でも見つからない」。西独側の公式な説明によると、われわれが今、目にしている秘密追加議定書は第 2 次世界大戦の終わりごろ、リップントロフ外相のところにあったいくつかの文書を収めたマイクロフィルムの中に記録されていたものだ」と説明した (朝日新聞 1992.8.23)

斎藤 (1995:339) は、1995 年 2 月 23 日からのトレチャコフ美術館 (モスクワ) の「大祖国戦争の公文書展」に、「ポーランド分割の地図」も添えて「独ソ不可侵条約付議定書のオリジナル」が展示されたと知り、「それらがどこで発見されたのかは、不明である。もしロシアで発見されたものであるならば、調印後 55 年の間に辿った議定書の運命を知りたい」と「付記」した。上記の訳者解説の言う「公開」はこの展示を指すと思われる。

著者は「オリジナル」が「どこで発見されたのかは不明」と言うが、発見場所はすでに 1992 年に公表された。

1992 年 10 月 29 日に「ヤコブレフ元ソ連大統領首席顧問、ボルコゴノフ・ロシア大統領顧問らが記者会見」で、秘密議定書の「原本」[ロシア語]が見つかったと発表した。それは旧ソ連共産党中央委員会の文書庫にあり、そこには「1952 年 10 月 30 日にモロトフの秘書部から受け入れた」と記されていた (朝日新聞 1992.10.30、1992.11.17)。

その閲覧記録によると 1975 年にグロムイコ外相、1979 年にゼムスコフ外務次官、[ゴルバチョフ時代の] 1987 年にボルジン党中央委総務部長が閲覧した。発見された「原本」は「今後ロシア外務省の歴史文書庫に保管される」(同前)。

従ってブレジネフ政権もゴルバチョフ政権も原文を知っていた (書記長に伝えられたかどうかは分らないが)。

斎藤 (1995:10) によれば著者は、オリジナル発見発表直後の 1992 年 11 月から 1993 年 4 月まで「ロシア外務省の裏手にある外交資料館」[上記の「ロシア外務省の歴史文書庫」だろう]に通った。しかし著者のこの条約と秘密議定書の紹介 (斎藤 1995:26-29) は「オリジナル」からではなく、1988 年にエストニアの新聞に掲載したもの (典拠はたぶん 図 5 と同じ) を紹介した書籍からの訳載である。資料閲覧許可をえた彼女にも閲覧が許されなかったのだろうか。

## 3) 元ソ連諜報幹部クリヴィツキーによる暴露

独ソ不可侵条約の背景は、内幕に詳しくた元ソ連諜報幹部クリヴィツキー (Walter G. Krivitsky) によると: 「最近 6 年間のスターリンの全対外政策は、ヒトラーとの取引で好ましい地位を占めようとしてとられた一連の策略」であり、「スターリンの希望は、ヒトラーが、かれの接近を受け入れるのが有利だと思ふような立場をとること」だった。

「6 年間」とはヒトラー政権誕生 (1933 年) から、しかしとりわけ 1934 年 6 月 30 日夜の「政治局の非常会議」から。1939 年 8 月の独ソ不可侵条約締結までを指す。同条約締結がスターリンの対独政策の完成であった。

図 7 クリヴィツキー (左端) とトロツキー (中央)



(注)「レオン・トロツキーと米国の彼の称賛者たち」と題する写真。1940 年 4 月 (トロツキー暗殺 4 ヶ月前) メキシコで。(出所 ↓) [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Leon\\_Trotsky\\_and\\_American\\_admirers\\_Mexico\\_-\\_NARA\\_-\\_283642.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Leon_Trotsky_and_American_admirers_Mexico_-_NARA_-_283642.jpg) (public domain)

上記の政治局会議のテーマは「ヒトラーによる第一次血の粛清」(レーム派とシュライヒャー派の粛清) 開始の帰趨とソ連外交への影響評価であった。欧米の解釈では結果は「ナチ権力の弱体化」であったが、スターリンは「政権とヒトラー自身を強化することになろう」と述べ、「政治局は、何としてでも、ヒトラーにソヴィエト政府と取引するよう説き伏せることに決めた」。

このスターリン政策は「1936 年の終り頃、反コミンテルン協定という煙幕の蔭で交渉された日独秘密協定の締結を機に勢づけられた」。「日独防共協定の文面はコミンテルンを対象としたが、その秘密協定には本協定の意に反した対ソ支援や条約締結をしないとあった。」

「わたしと部下の努力」でこの秘密協定をスターリンが知ると、彼は「ヒトラーとの取引を何としてでも進めようという絶

望的な企てを始めた」。

「ともにヴェルサイユ体制に反対していた」独ソの協力関係は「1922 年のラッパロ条約」以来であり、そもそも「両国は、伝統的な商業関係と相互の利益をもっていた」。協力として「ドイツ国防軍と赤軍との間に秘密取決め」も存在し、ソ連はドイツが禁じられていた「砲術、戦車将校の訓練と、航空および化学兵器の開発」を「ソ連領内」で行なわせ、ドイツは「軍事的知識」を与え、「資本を投下して利権をえ」、ソ連は「ドイツから機械と技術者を輸入した」。

[ドイツ・フォードは農業集団化のためのトラクター工場をソ連に建設し技術指導した。その責任者だった人に私は偶然会ったことがある。たぶんその技術は戦車製造にも役立ただろう。]

「モスクワは、ヒトラーの共産主義にたいする悪罵を、権力への途中での策略だとみなし」、スターリン自身が「赤軍・ドイツ国防軍間の協力の伝統に慣れそんでいた」。そのため「スターリンは、ヒトラー勃興後にも、ベルリン・モスクワ間の秘密提繋を破る努力をしなかった」のみならず、「逆に、これを、維持しようとして最善をつくした」。

ヒトラーは政権獲得後「除々に赤軍とドイツ国防軍との間の密接な結びつきを解消した」が、スターリンは「ヒトラーの友情をえるのに、いよいよ窮々するだけだった」。1933 年末にモロトフが「ドイツとの関係は、つねにわが対外政策中できわだった位置を占めている……ソ連としては、その対独政策を何ら変更する理由をもっていない」と言明した。(以上クリヴィツキー1962:第 1 章から)

以上のようにクリヴィツキーによれば、独ソ不可侵条約は要するに独ソの反ヴェルサイユ同盟の帰結であった。

もちろん警戒心の強いスターリンが「ナチ一辺倒」状態であったわけではない。例えば、独ソ不可侵条約締結直後にフルシチョフに、「スターリンは、また、この協定が独ソ戦の勃発をしばらく遅らせるであろうし、その結果、ソ連が中立を維持し国防を強化できるだろう、その後は事態の推移を見守らねばなるまい、と語った」(レオンハルト 1992:18)。

しかしスターリンの有名な 1929 年 9 月 9 日のモロトフ宛ての手紙は、英仏への強い警戒を指示した:「イギリス問題では急ぐそぶりを見せてはいけない。いま関係の回復を必要としているのは、われわれよりもヘンダーソン〔外相〕の方なのだ。いま危険なのは、すでにわれわれによって窮地に追い詰められているヘンダーソンではなく、物事の道理を踏みこえてワイズとその悪党一味を信用しているリトヴィーノフである。ヘンダーソンに“心のこもった”回答をするようにわれわれに勧めている“わが”パリの“顧問たち”はとりわけ危険である。彼らはヘンダーソンの手先であって、イギリス政府に情報を流し、われわれにはデマを流している。要するに、われわれの陣地からは一步も後退してはならないのだ。忘れてならないのは、われわれはイギリスとだけではなく、資本主義の全世界と戦いをおこなっている(敵との交渉も戦いだから)ということだ。なぜならマクドナルドの政府は、“新しい”、より“外交的な”、より変装した、すなわち、より“効果的な”方法もちいて、ソヴィエト政府を“軽蔑し”、“抑制する”ことにかけては、資本主義政府のなかの前衛であるからだ。マクドナルド政府は資本主義の全世界に、その政府が(柔軟な方法のおかげで)ムツリーニやポアンカレやボードウィンよりもより多くをわれわれから奪い、また資本家のシャイロック自身よりももっと大物のシャイロックで

あることを誇示したいのだ」(リー他 1996:234)。

リー他(1996:vii-viii)の「まえがき」でロバート・C・タッカーは、スターリンを「ロシア帝国ボリシェヴィクであるという命題」を支持し、「スターリンの頭のなかではソ連国家と国際革命は一体」であり、だから戦後満州や新疆、中東欧も勢力圏に置こうとしたと指摘した。

英米独仏伊日など資本主義全世界を警戒しつつも 1930 年代(1931-1939 年)のスターリンはドイツとの提携に力点を置いた。30 年代初めに彼は、ナチが政権を取りそうであり、そうなるドイツはいずれ東にも向かうとしても、まずはフランスなど西へ侵攻するので、その間に社会主義建設を進め得ると判断し、独ソ不可侵条約はナチ・ドイツに安心して西へ向かわせる保証として締結した、と考えられる。

このことを次項にあるノイマン証言とその後の事実経過が示した。それはまたクリヴィツキー証言を裏付ける。

#### 4) ナチが権力を握れば「我々は落ち着いて社会主義を建設することができる」(1931 年スターリン):ノイマン証言

1931 年末にスターリンが、当時 KPD 最高幹部の一人であったノイマン(Heinz Neumann)とのモスクワでの会談の際に、彼の失脚につながるある言葉を語った。ノイマンはモスクワからの帰国を出迎えた妻マルガレーテ・ブーバー=ノイマン(Margarete Buber-Neumann、以下マルガレーテと略記)にすぐにその言葉を伝えた。これは、ノイマンにはその言葉の衝撃がいかにか大きかったことを示す。

だから彼女は、「決して忘れられない」その言葉についての詳しい証言と考察を Buber-Neumann(1957:194,283-295,J223,250-263)に記した。それによれば:

「左派」かつスターリンの寵愛を受けていたノイマンは、〔前年末に広東蜂起失敗で面目を失ったにもかかわらず〕1928 年秋にスターリンによってコミンテルンから KPD 指導部に送り込まれた。テールマン(Ernst Thälmann)の娘婿ヴィットルフの党資金横領問題でもめる KPD 指導部のテコ入れのためであった。

それは、1928 年コミンテルンの「理論家たち」が、「資本主義の安定化の終焉」と「資本主義の危機の尖鋭化」による「全世界にわたる革命の強力な新たな飛躍」を「予言した」ことから、スターリンがドイツ革命を「彼の膨張的な対外政策に組み入れ」たテコ入れでもあった。

ところが「1929 年以後のドイツにおける国家社会主義〔ナチ党〕の目に見える強大化」に直面し、「革命の勝利がますます疑わしく」なり、「スターリンはまもなくドイツにおける共産主義革命への彼の思惑を放棄し、〔ゲルマン〕民族主義の〔ナチ・〕ドイツとのソビエトロシアの協力を彼の帝国主義計画に組み入れることによって、彼の対外政策の 180 度の転換を実行した」〔そのため反 SPD だけではなく反ナチにも強硬な KPD 左派が邪魔になる。〕

そこで〔左派の領袖である〕「ノイマンは 1932 年に、ドイツの共産主義運動への恥ずべき裏切りを意味するスターリンの対外政策のこの転換」犠牲〔KPD 幹部失脚〕になることになる。

まずスターリンはノイマンとの 1931 年初めの会話において初めて、ノイマンを「左翼セクト的大衆政策」と非難した。これは、チューリンゲン州の SPD 政権転覆のためのナチによる住民投票への参加を拒否したことが理由であった。〔この参加拒否は結果的に SPD 政権擁護になるが、直接は反

ナチであり、それが「左翼セクト的」とされたことになる。]

ノイマンがスターリンの上記 2 つの言葉を理解できないでいると、コミンテルンが彼に「“左翼セクト主義的”政策の継続」を「再三批判した」。

それでもノイマンは、1 年も経たないうちの 1931 年末の 会談でスターリンに、「ナチによる脅威の増大にたいする彼の政策を弁護」した。

それに対してスターリンは、「ドイツでナチが権力についての場合に彼らはもっぱら西欧相手で忙しいだろうから、我々は落ち着いて社会主義を建設することができるだろう」ということを、ノイマン、あなたも信じないのか?」と答えた。

[ナチ・ドイツの軍は西へ向かうと言うのであり、彼女の後述の考察によれば、8 年後の独ソ不可侵条約はナチに西欧急襲のための「背後〔東方〕の援護」であった。]

[スターリンはここでノイマンに「あなた」(Sie) という敬称を使った。ところが邦訳(ブーバー=ノイマン 1968:251)は「君」(du) という親称に変えた<sup>9</sup>。二人称の敬称・親称の区別はロシア語でも同様である(вы, ты)。共産党員の関係は「同志」(Genosse, товарищ)と呼ばれ、身分に関係なく親称を使うが、スターリンはここであえて敬称を使ってノイマンにもはや同志ではない、よそよそしい関係だと示し、失脚を示唆した。敬称によって敬意を示したわけではない。]

ノイマンがモスクワからベルリンのフリードリヒ通り駅に着いた時に「私〔著者〕に伝えた最初の言葉」がスターリンのこの言葉だったので、それを「私は決して忘れはしない」。

[彼女もドイツ共産党員であり、しかもコミンテルンのインプレコール編集部(ベルリン)勤務として状況を知る立場だったのだから、彼女にとってもスターリンのこの言葉は明らかに仰天の出来事であり、忘れようがなかった。]

KPD の「1932 年 10 月の党協議会決議」がノイマンを、「社会民主主義的労働者に対するセクト的態度」[上記のように反ナチの言い換え]と「ボルシェヴィキ的自己批判の展開に対する抵抗」ゆえに批判し、「KPD の無力さの責任を押しつけるつもりで贖罪の羊のためにノイマンが用意された」。「こうしてノイマンはスターリンの寵愛弟子から聞き分けのない子に転落した。]

同決議は、「彼とスターリンとの論点であった」[ファシズムとの闘争方法についての決定的な相違には全く触れなかった]。

その後、ノイマンと、彼に「最も近い共同闘争者レンメレ」(Hermann Remmele)らが「とつとつに絶縁、排除されたあとには、“グループ闘争”が“分派闘争”というより重大な犯罪に、“左翼的”偏向が“敗北主義的、日和見主義的、右翼的”誤りに置き換えられ、何年かのち、つまりノイマンとレンメレがモスクワで逮捕される直前には、コミンテルンの国際統制委員会が、“ノイマンとレンメレは、彼らの党敵対的分派闘争によって...ドイツにおけるファシズムの権力獲得を助けた”と定式化した」。

[従って非難は極めていい加減だと著者は言いたい。加えて、すでに 1931 年に「ナチ政権を望んだのは誰だ、スターリンおまえだ」と言いたいだろう。1928 年からノイマンとレ

ンメレはテールマンと並ぶ KPD トップリーダーであり、「三頭政治」と呼ばれた<sup>10</sup>。]

スターリンの独ソ戦略を著者は次のように見た:

レーニンは「ボルシェヴィキの勝利後」、ドイツ革命が続くことを「確固として」期待し、「それが国際主義への彼の信頼の本質的構成部分であった」し、ヨーロッパ革命がソ連での「社会主義建設の成功」の「前提」と考えた。

しかし彼の「死後すぐに」スターリンは「国際主義の正しさと勝利の機会への疑念」を抱き、「すでに 1920 年代末に本国での社会主義建設を宣伝した」。さらに「1930 年以後」、「旧来のボルシェヴィキの意味」での「国際主義と世界革命」への「一切の希望」を捨て、「明白なロシア国粹主義と帝国主義的膨張計画」に乗り換え、以後革命は「赤軍の助けで実行されることになった」。

そのため、彼の「ドイツ政策も変化し」、[KPD による]「革命を妨害するスターリンの努力が始まった」。ドイツ革命の成功は、「ドイツ工業の強さ」を背景に KPD が、コミンテルンにおける「ソビエトロシアの主導的地位にとって危険になり得る」からであった。

「彼の帝国主義的目的にはナチ・ドイツが、共産主義ドイツよりも有益であった」ので、[ナチではなく]SPD を主要敵とし、また[対ナチのための]KPD と SPD の「統一行動」を阻止した。また彼は、[ノイマンを標的に選んだ]「1931 年から KPD の闘争力を系統的に弱め、それによって共産主義革命を妨害するために、何でもやった」。

コミンテルンでの「スターリンの代弁者マヌイルスキー」(Dmitry Manuilsky)が 1931 年 4~5 月の同執行委員会第 11 回総会で、「ヒトラー的特徴のファシズムが主要敵だ」という SPD の主張は「正しくない」と「はっきり語った」。彼は 1932 年 1 月には「国家社会主義〔の政権獲得〕はプロレタリア独裁のための一種の序章」となり、彼らが[主要敵である]SPD や労組を「粉砕する」ので、「そのあとには労働者大衆は KPD 指導部に身を委ねるだろう」と述べた。

[当時すでにナチ党と KPD は死闘を演じていたのだから、SPD のみならず KPD もナチによって粉砕される可能性があることをマヌイルスキー、従ってスターリンは当然見ていただろう。現実には両党とも粉砕され、戦後の東独では赤軍によって KPD と SPD がソ連に従属した党として再建され、合同した。]

スターリンは[ナチ政権誕生の]「1933 年以後にも引き続きにナチ・ドイツとの同盟によって彼の膨張意図を実現するという彼の計画を、目的意識的に追求した」。「ここで著者はクリヴィツキー(1962)を援用した。]

著者が 1933 年の事例としてあげるのは、1 月 22 日[ナチの政権獲得 8 日前]にナチ突撃隊(SA)が通告したベルリンの「労働者地区における行進」への対応である。

これに対して、[ノイマンと異なり KPD の]「党指導部にまだ属していたレンメレ」が、「ドイツ労働者は無防備でナチのなすがままであるべきではなく」、「共産主義者の対抗デモで応えることを提案した」。

ところが突撃隊行進予定日の直前にコミンテルンから、

ten?" (Buber-Neumann 1957:284)。

<sup>10</sup> 著者はノイマン・グループ排除やテールマンとの対立の内情、ウルブリヒトの暗躍の詳細も説明した。また星乃(2001)に諸資料による「ノイマン・グループ」の説明がある。

<sup>9</sup> 原文: „Glauben Sie nicht auch, Neumann, daß, falls in Deutschland die Nationalisten zur Macht kommen sollten, sie so ausschließlich mit dem Westen beschäftigt sein würden, daß wir in Ruhe den Sozialismus aufbauen könn-

「KPD のいかなる対抗デモもしてはならず、党指導部にはナチスとのいかなる衝突も起こさない責任があるとの断定的な指示」の電報が届いた。レンメレは「これに激しく抗議を試みた」が、無駄だった。KPD 指導部は「この命令に無抵抗に屈服した」。

著者が言うには、この命令は「ドイツ労働者運動の背中への短剣ひと突き」であり、「スターリンのドイツ政策の一貫した継続」であった。

空しく抵抗したレンメレはとがめられ、結局彼も、ノイマン同様に 1934 年自己批判声明を出し「恭順」を示した。

「その後スターリンはようやく 1939 年に待望のチャンスを手にした」。「悪名高い条約」[独ソ不可侵条約とその秘密協定]によってポーランドをナチと分割しただけではなく、ナチ・ドイツの「西欧諸国急襲のために背後を援護した」。

「彼はその間に“落ち着いて社会主義建設を終え”、最後に漁夫に利を得る第三者として、赤軍が助力する革命によって戦争により弱体化した西欧諸国を、夢にみた大ロシア帝国に編入し得るだろう、と期待した」。

著者は 1929 年、KPD の依頼で非合法滞在の男女ペアをポツダムの自宅にかくまったことがある。その夏に彼女の「ノイマンとの愛情」が始まり、秋になってノイマンが彼女の自宅に来てそのペアと鉢合わせになり、彼女はその男がノイマンの旧知のディミトロフ (Georgi Dimitroff) だと知った。

ディミトロフは「西欧ビューロー」(WEB、コミンテルンの西欧での非合法活動とスパイ活動の機関) 責任者であった。

周知のように彼は 1933 年 2 月のナチの陰謀による国会炎上事件で他の 2 人とともにゲシュタポ(ナチ秘密警察)に逮捕された。裁判で彼は「勇気ある最終弁論」を展開して、世界に知られた。

しかし彼は最終弁論前に、犯人とされた彼と 2 人をソ連に引き渡すという「ゲシュタポと GPU(ソ連秘密警察)の間」の「秘密協定」の存在を「知っていたのではあろう」。

その結果裁判後、彼はソ連で暮らすことになり、モスクワへ向かう飛行機の中で「すでに闘士としての自己意識」を捨て去ったに違いない。その証拠に空港到着時に、出迎えた当時のコミンテルン書記長ピアトニツキー (Pjatnitzki) に「どうなのかね、同志ピアトニツキー、ぼくは万事正しくやっただろうかね？誰もぼくを批判してはいないかね？」と質問した。「スターリンをめぐる死の雰囲気は彼の性にあわなかった」(Buber-Neumann 1957:136ff.,J174-187)。

彼女自身も、夫ノイマンの逮捕・銃殺の翌年、1938 年 6 月 20 日モスクワで逮捕され、1939 年 1 月 19 日に「社会的に危険な要素」として自由剥奪 5 年となり、カラガンダでの「非人間的な収容」となった。

ところが彼女は 1940 年 2 月 5 日に、「望ましくない外国人」として[というよりもヒトラーによって収容が「望まれるドイツ人」として]、スターリンの収容所から、プレスト・リトフスク [=ポーランドの独ソ共同分割直後の新国境]で、ドイツ側に引き渡され、「即座に」ヒトラーのラーフェンスブリュック女性強制収容所 (Frauen-KZ Ravensbrück) に入れられた。

[スターリンからヒトラーへの、マルガレーテを含む政治犯引き渡しの様子はレオンハルト (1992:83-84,86-90) などに詳しい。]

1945 年 4 月彼女は、[東では]再び拘置されることを恐れ、西へ逃亡し、西独で著述家・作家として知られた

(Weber 2008:635、ブーバー=ノイマン 1968:解題)。

独ソ両独裁間の提携は、首脳や外交官のみならず、秘密警察相互の連携や収容犠牲者の引き渡しもあるほどに密であった。

[著者の独ソ両収容所の体験に基づく邦訳として『第三の平和』や『スターリンとヒトラーの軛のもとで』、『カフカの恋人ミレナ』があり、レオンハルト (1992:86-90) にもスターリンのカラガンダ収容所からヒトラーのラーフェンスブリュック女性強制収容所への移送の経過が『第三の平和』から引用されている。]

## 5) 斎藤(1995)の擁護と幻想

斎藤(1995)はソ連崩壊後にソ連外交文書を詳しく研究し、あわせて諸論争も検討した労作であり、大変参考になる。しかしその結論(同:終章)は:

「ドイツは、ソ連の中立保障を得たことによって、ポーランドへの攻撃に際して背後の不安を取り除くことができた」。「ソ連がはじめ意図していた独ソ不可侵条約は、英仏ソ相互援助条約によるヨーロッパ集団安全保障体制を妨げることはできず、もしかしたらヨーロッパの戦争を阻止することができたかも知れない」。「ソ連の独ソ不可侵条約の動機は、栗原が正しく分析しているように、戦争回避のための対独宥和政策であった」[いわゆる時間稼ぎ論]。「ポーランド攻撃の必要上ソ連を中立化させる目的でドイツがイニシアチヴをとったのは明らかであり、ソ連は初め慎重に、次第に積極的に対応し、終盤ドイツにリードされて、独ソ不可侵条約と付属議定書に調印したのである」。「[但し]不可侵条約によってドイツのポーランド攻撃を容易にしたソ連の責任は免れ得ない」、などである。

これらの結論は、以上に紹介した諸説とは正反対であり、結局ソ連は戦争回避を願う平和愛好国であったが、ドイツにリードされ受動的に不可侵条約を結んだことになる。

このような評価はクリヴィツキー (1962) を検討し批判した上であれば、説得力が生じたかもしれないが、著者は同書に全く言及していない。

また対独戦争への「時間稼ぎ」という説は、戦前戦中にソ連内で言われたことがなく、1947 年にスターリンが創り出した自己弁護の詭弁である。これはレオンハルト (1992:73-74) が收拾したクラフチェンコの回想とレオンハルト自身の体験に基づいて「確証」された(次項に掲載)。だからレオンハルト (1992) を単なる注記で片付けるべきではなかった。

斎藤(1995:261-262) 自身も不可侵条約締結 2 日前のスターリンからヒトラーへの親書に、「不可侵条約締結へのドイツ政府の同意は、両国間の政治的緊張を解消し、平和の確立と協力のための基礎となるでしょう」とあることに注目し、同条約はソ連が「提起し」ドイツが「同意ないし承諾を与えたこと」、同条約をスターリンが「平和の確立と協力のための基礎」と位置づけたことを認めた。ところが、「これによってスターリンが具体的に何を考えていたのかは分からない」ととまどい、「明らかに、これはソ連外交の変質を意味していた」と片付けてしまった。クリヴィツキーや Buber-Neumann (1957)、レオンハルト (1992) などによれば、これが 1930 年代全般のスターリン外交であった。

斎藤(1995:253) は、秘密議定書がはっきりと双方の「利益圏」区分を謳っているにもかかわらず、「利益範囲」[=利益圏]の分割ではなくて、“対外政策の分野での問題”に関

して中東欧諸国へのドイツの干渉を回避したり、日本のモンゴルでの戦争にドイツがプレッシャーをかけてくれることなどを意図していたとも思われる」と弁護する。

利益圏区分だから、「中東欧諸国へのドイツの干渉を回避」する意図は当然であるが、ソ連はそれに留まらず利益圏としての支配拡大を意図し、実行した。

その上さらに斎藤(1995:282)は、秘密議定書による分割対象の国々全部の名を挙げて、それらの「ソ連を合む集団安全保障への不決断あるいは絶対的拒否の態度」を批判し、加えてポーランドは「ソ連に対抗した汎スラヴ主義をバルト諸国に及ぼそうとする傾向があった」と糾弾した。ソ連の支配欲ではなく、支配拡大対象にされた国々にこそ問題があったと言う

こうした議論は、上記に引用したスターリン戦後著作集の東欧・バルト諸国侵略の弁解にとって大いなる援軍であり、秘密議定書の是認になる。ソ連主導の「安全保障」を受け入れるかどうかは関係各国の主権事項である。それに危険を感じる国々の「利益圏」組み入れ、つまり軍事制圧を取り決めた秘密議定書の是認は驚きである。

このような論旨は著者のソ連幻想と無縁ではない。

すなわち著書末尾には、「ドイツとの条約を検討する段階で、ナチズム、ファシズムに対する批判がスターリンとモロトフの言説から消え去っており、彼らのソ連外交に関する思考は、社会主義国家いや反ファシズム国家として民主主義と平和を護りぬくという理念に欠けており、彼らが非難してきた自国利益中心のブルジョア外交の悪しき風習にどっぷりつかっていた」とある。

この文は一見批判的だが、「ロシア革命の神話」が前提とされている。当時事前に独ソ同盟の「噂」を「ポーランド人の友達」から得ていたヘンリー・ヤコービ(一時ドイツ共産党員だったがヒトラー政権誕生の評価の違いで離脱)らの「社会主義グループ」は、独ソ不可侵条約是認を表明した者たちについて、「レーニンの戦友達が全員スパイとして銃殺され」、「スペインの革命運動がソ連の手先によって裏切られ」、「スターリンがヒトラーと協定を締結」したにもかかわらず、「過去の思考過程から離れたりするのは困難であることが判明した。そうすることが最も困難であったのはロシア革命の神話を打破できなかった者達であった」と断じた(レオンハルト 1992: 111)。

斎藤の上記の批判では、ソ連当局には「民主主義と平和」の理念があたかもこの時期の対ドイツ交渉においてのみの欠如し、それ以外ではその理念が実践されたかのようである。この時期の東欧・バルト諸国への態度にその欠如は明らかであるが、この時期以外でも「民主主義」や「平和」という標語はあっても(例えばコミンフォルム紙「恒久平和のために、人民民主主義のために」)、統治の実際はそういう理念とは縁遠かった。周知のように「人民民主主義」もソ連共産党支配下の一党独裁の隠蔽用語にすぎなかった。

早くから、いわば「自国利益中心のブルジョア外交の悪しき風習にどっぷりつかっていた」スターリン政権の姿を、機密情報によってクリヴィツキーが報告した。クリヴィツキーによる暴露にも不正確さや不足もあるだろうが、全体としては納得がいく。もし斎藤(1995)にその検討と批判があれば、私の斎藤読後感はずっと変わったかもしれず、まことに残念である。

## 6) 多方面への深刻な打撃:レオンハルト(1992)が收拾

斎藤(1995:71)は「独ソ不可侵条約がコミンテルンの国際共産主義運動に深刻な打撃を与えた」ことを認めたが、それについては「当時の人々の回想を集めた」レオンハルト(1992)が「生々しい印象を与える」と注記するだけに留め(注 64)、内容の検討はしなかった。

レオンハルトが収集し伝えた「深刻な打撃」は、「コミンテルンの国際共産主義運動」のみのだけではなく、共産党系以外の反ファシズム組織や各国政府の打撃ないし対処、またソ連共産党とコミンテルンの内部なども含まれた。

その収集対象は、①最高指導部、②ソ連の人々〔亡命者を含む〕、③ドイツの反ファシズム地下組織、監獄、強制収容所、亡命者、④フランス在住の反ファシスト、⑤他の国々の反ファシスト、⑥共産主義的知識人の転向、に分類して記述された。

そのうち①の一部と、②のクラフチェンコによる「時間稼ぎ」論批判のみを紹介する:

### ●事後に知ったフルシチョフ(当時政治局員)の回想

ドイツ外相「リップントロップが具体的な提案を持参」するので「彼と接見されるようお願いいたします」とヒトラーが言って来た、明日彼が来る、とスターリンが話した。「最初、私は啞然としてしまった」。

翌日スターリンは「リップントロップが不可侵友好協定の草案を持参し、ソ連がそれに調印した」と語り、「とても満足しているようであった」。英仏外交官は「この協定調印のことを知ったらすぐに帰国するとスターリンが付け加えた」。

「我々は、党の会議でその協定を論議することさえできなかった。…ドイツと提携するという考えを受け入れることは、我々には極めて困難であったのだ。なぜなら、我々は共産党員であり、ファシストの哲学的見解や政治的立場に相変わらず反対していたからである」(同前:17-18)。

### ●事前に知ったコミンテルン中欧担当書記ゴットワルト

政治局員でさえ事前には知らなかった独ソ不可侵条約予備交渉を「コミンテルンの何人かの最高幹部が…少なくとも暗示くらいは受けていた」。その一人がチェコスロバキア共産党指導者で、当時コミンテルン執行委幹部会員・中欧担当書記であったゴットワルト(Klement Gottwald、戦後には大統領)であった。

シュツツブント武装蜂起(1934年)参加後モスクワに亡命したオーストリア共産党員エルンスト・フィッシャーの回想によると、コミンテルン本部の執務室でゴットワルトが語った:

ミュンヘン協定[1938年9月]締結の「会議室にいた」のは「ヒトラー、ムッソリーニ、チェンバレン、ダラディエの四人だ!」[順に独伊英仏首相]。それによって「チェコスロバキアがずたずたに引き裂かれ、[その3ヵ月後]1938年12月にパリで「ボネ閣下<フランス外相>がリップントロップ閣下に確約なさいました、とさ。『私どもフランスは東ヨーロッパに全く関心がありませんから、貴方がたドイツがどうぞご自由になさって下さい。新しい計画は大ウクライナでございますね。もしお望みなら、ヒトラー閣下、ウクライナをお取りあそばせ』とね。…しかし、この強盗<ヒトラー>は…それがあまりに危険な冒険だとわかったら、殺害予定の相手<ソ連>にこっそりと耳打ちするんだ。『二十年前の1920年に、貴方の国から手足がもぎとられましたね。そうです、ウクライナの大部分と白ロシアのことですよ…ポーランド人にね。…もし貴方がご自分のものを取り戻しても、私は貴方を非難しま

せんよ」とな)[<>内は著者挿入]。

フィッシャーが「ポーランドが分割されるのか？」と聞くと、彼は「ショックを受けたかい？ 受けたんだろ？ 二の句も告げないだろ？ 確かに、こんなことはいいことではないよ。しかし、政治の世界ではな、どの国家も自国のために警戒心を発揮しなければならぬのだ」と続けた(同前:19-22)。

●目標は「ポーランドを除去すること」(マヌイルスキー)

コミンテルン内で事前に知っていた人間は「フィッシャーとゴットワルトだけであったようだ」。他のすべてのコミンテルン関係者の回想は不可侵協定公表後である。

その一人スペイン人民戦線政府文部大臣で、ソ連に亡命したヘスス・エルナンデスがコミンテルンにおけるソ連共産党代表マヌイルスキーの発言を記録した：

「我々は時間稼ぎをせねばならないのだよ、エルナンデス君」。「ですけど、独ソ不可侵協定はヒトラーに行動の自由を与えますよ。そうなれば、ソ連にとって恐るべき結果をもたらしますよ」。「ふん、そうかね。ポーランドは、余りにも長い間、ソ連侵略をたくらむ者どもの踏石になっていたのだが、我々のさしあたっての到達目標は、このポーランドを除去することなのだ」。

「しかし、フランスとイギリスがポーランドと条約を結んでいますよ。戦争になってしまいますよ」。「ポーランドを防衛するためにドイツとソ連に取って代わって戦争をしかけるものは、自殺願望マニアだけだろうよ。チェンパレンやその同類どもは余りにもおじけづいていて、こんな大仕事には乗り出せないのだ。彼らは、ミュンヘンでしたように抵抗し、わめきたてるだろう。しかし、彼らが戦争に賛成投票するとは、私は思わないね」。「もしも彼らが賛成投票したら、どうなるでしょうか？」。「備えは万全だ。我々が損害を受けるはずはないのだ」。

[英仏はポーランド侵攻で対独のみ宣戦布告した。]

私が納得していないような顔つきをしていたので、マヌイルスキーは続けてこう言った。「もしも資本主義諸国がお互いの喉を切り裂きたいと思うのなら、ますます結構なのだ。その時機がほんとうに到来して、彼らが消耗しはじめたら、我々はきっとその両方に泣きつかれるだろうよ。そうしたら、我々は一番ふさわしい相手を選べるのだ。心配しなさんな。わが軍は、どんな資本主義国のためにも、火中の栗を拾うようなことはしないのだ」(同前:23-26)。

[マヌイルスキーは「時間稼ぎ」と言いつつも、「備えは万全だ」とも言う。彼が事前に不可侵条約締結を知っていたかどうか明記されていない。]

●ルート・フォン・マイエンブルクの回想

彼女はズデーテン生まれのチェコ人で、左翼知識人のサークルに所属、「社会民主党に幻滅して、ソビエト連邦に注目」し、他方で 1931 年にベルリンを訪問して「ドイツ・ファシズムの脅威を直接肌で体験した」。1934 年オーストリア共産党入党後、ソ連に亡命、赤軍参謀本部第 4 部[以前にクリヴィツキーも所属(脚注 4)]の諜報員としてドイツ潜入、1937 年にはコミンテルンに移籍した。彼女の回想(同前:34-35)によると：

「私達は大変なショックを受けてしまい、何時間も話すことができなかつたほどでした。それから、尋ね合ったものです。…秘密追加議定書については、何も知りませんでした。…しかし、その当時ですら、新聞《プラウダ》に印刷された公式の不可侵協定が唯一の協定なのではない、という噂は流

れていましたがね」。

英仏米は「依然として帝国主義国家でした。ですから、この協定の狙いが現実に何であったのかを考えることで、私達は自分の良心をなだめようとしたのでした。ヒトラーの政治体制に反対したドイツの労働者達が強制収容所で拷問にかけられて殺されていたのですが、こういうこと全体の意味がこの不可侵協定のために疑わしくなってしまったのです。ドイツのヒトラー反対者に何が起こったかは無視されてしまい、彼らは突然、“より高度な”政治的考慮を求めて死んでいった犠牲者にされてしまったのです。本当に、これは破廉恥なことでした。それで、私達は長い間この恥ずかしい思いを克服することができませんでした。私達は、この良心にかかわる問題で自己自身を欺くために、帝国主義や国際的闘争やその他すべてのことについてのマルクス主義的概念を総動員せねばならなかったのです」。

●ヴィクトル・クラフチェンコの回想：時間稼ぎと正当化

彼はケメロボで工場長をしていて、ソ連の多くの高級官僚を知っていた。その回想録によれば：

「スターリンが単に“時間稼ぎ”のために演技している一方で、ナチス・ドイツに対抗して熱心に軍備を増強していたというこの見解は、ずっと後になってでっち上げられたものであり、ドイツを信頼してしまったクレムリンの破滅的な大失策を採り消すためのものであった。この見解はあまりに見えすいた作り話であったために、独ソ戦の最中のロシアではほとんど話題にもならなかった。この見解が大まじめに提起され信じられているのを聞いたのは、私が自由世界に脱出した後であったにすぎない。これは、ヒトラー・スターリン協定の最も重大な側面であった大規模な経済協力事業を無視する見解であった。この経済協力のために、ソビエト連邦は自国の防衛準備に必要な生産物・原料・生産能力そのものを奪われたのである」。

[これをレオンハルトが自身の体験から確証した:]

「クラフチェンコの分析は、私自身の経験によっても確証されるのだ。ヒトラー・スターリン協定の全期間中(1939 年 8 月 23 日～1941 年 6 月 22 日)に、ソ連の出版物の中でこういう見解の片鱗さえも私は見たことがなかった。出版物よりも集会の方で多くの情報が伝えられることがあったが、そういう集会においてさえ、我々の力を結集して差し迫るナチス・ドイツの攻撃に備えるためにこの協定が締結されたのだ、というようなことを示唆する演説を私は聞いたことがなかった。

“時間稼ぎ”という論法が最初に使われたのは、1941 年 6 月 22 日にドイツがソ連を侵略した後であった。スターリンは 1941 年 7 月 3 日に行なった演説で、ソ連国民を前にしてこの独ソ不可侵協定を擁護しなければならなかったのだ。“ドイツと不可侵協定を締結することで、我々は何を獲得したのでしょうか？”スターリンは愛好する表現を使って尋ねた。そして、いつものように、自分でその答えを示した。“我々は、一年半の間、わが国の平和を獲得しました。そして、もしもファシスト・ドイツがソ独協定を破ってわが国を敢えて攻撃するのなら、このドイツを撃退できる国力を準備する機会が確保されたのであります”。

このスターリン演説の後に“時間稼ぎ”という理論が普及しはじめ、それ以来、この理論はソ連では必須の説明法になっていた。しかしながら、ロイ・メドヴェージェフが言ったように、「ソ連とドイツの“友好”がソ連の参戦を二年遅らせたものの、

この遅延は、ソ連よりもドイツによって、より効果的に活用されたのだ。周辺諸国を次々に占領していったドイツは、その当時、ソ連よりもはるかに急速に軍事力を増強したのである」(同前:73-74)。

ドイツ国防軍の無条件降伏署名式が行なわれた。この建物に「降伏博物館」が設けられ、それがドイツ統一後「ドイツ・ロシア博物館」という〔体を表わさない〕名に変わった。

写真 a~e (2016、©Kunihiko AOKI)

**補注 2 スターリンのコミンテルン解散理由**

ロイター通信へのスターリンの以下の回答が 1943 年 5 月 30 日ブラウダに掲載され、Leonhard (1955:259f., J207-8)にドイツ語訳がある:

「解散が正しい」理由は、

- a) ソ連が「他の国々の生活に干渉しこれらを“ボルシェヴィズム化”しようと努めているというヒトラーたちの嘘を暴露する」から。〔「嘘」ではなかった。〕
- b) 各国共産党が「外部の命令に基づいて活動しているという…中傷を暴露する」から。〔「中傷」ではなかった。〕
- c) 「党派や宗教的信念に関係なく」、「ファシズムに対する闘争」に「すべての国の進歩的勢力の結集」し、「自由を愛する諸国の愛国者の活動を容易にする」から。
- d) 「同権に基づく諸国民の将来の協力の組織化への障害を取り除く」から。

「私はこれらすべてのことが全体として、ヒトラーの暴政に対する勝利のための闘争における同盟諸国および他の一致した諸国の統一戦線の一層の強化になると考える。…解散は全く適時になされるという意見である。なぜなら、ファシストという猛獣がその最後の力を振り絞っているので、この猛獣を最終的に片付け、ファシストの抑圧から諸国民を解放するために、すべての自由を愛する諸国民の全般的な攻勢を組織することがまさに今必要だからである。」

**補注 3 ベルリン・カールスホルストのソ連軍政部跡**

ベルリン・カールスホルストのソ連軍政部(SMAD)跡(以下軍政部跡と略記)のうちの大部分は宅地になり、その住民の多くは西から来た公務員だと BStU 職員から聞いた。

残された敷地に「ドイツ・ロシア博物館」(写真 a)という名のソ連戦勝記念博物館がある。ドイツ再統一前は「降服博物館」という名称であった。その屋外にはソ連が展示を好む戦車(写真 b)や重火器が置かれている。

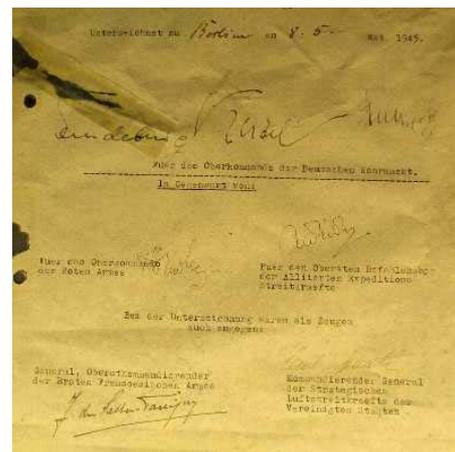
ベルリン州史跡保護局によると、軍政部跡は元々フリードリヒスフェルト空軍基地の軍用地であり、そこに工兵学校が 1936 年から建設され、翌年開校した。同校には、南端に将校集会所(図 a)、北端に練兵場と地上防空室があり、その間に講義棟や補助棟(兵舎など)、体育館、プール、下士官集会所があった。のちに「背後の用地」にソ連軍が集合住宅を建てた (<https://www.berlin.de/landesdenkmalamt/>)。

博物館に入るとまず大きな部屋があり、そこにベルリンでの降服文書調印式の会場が再現され(写真 c)、調印式や戦勝パーティ(写真 d はそこで祝杯を挙げるジューコフ)、占領直後のベルリンの様子などの映像が常時流れている。

降服文書も展示されている(その署名欄が写真 e)。ソ連側視点の戦争経過や被害などの克明な展示が大量にあり、見るには長時間かかる。

1945 年 4 月 23 日に工兵学校をソ連軍が占領し、軍政部司令部を置いた。翌日ソ連軍ベルリン市司令官も任命されそこに所在した。

1945 年 5 月 8 日には同校の元将校集会所であった建物(図 a)で、最高司令部チーフ・陸軍元帥カイテルらによる



但し軍政部司令部はヴュンスドルフ(Wünsdorf、ベルリンの南)に整備された大規模なソ連軍基地に移り、東独建国に伴い解散し、東独建国に伴い廃止され、ソビエト管理委員会(SKK)に再編された<sup>11</sup>。

[引き続きソ連軍ベルリン市部隊が常駐し、拘置所等も備え(5 節)、また SKK が利用した。同部隊の規模は旅団であり、上記のドイツ・ロシア博物館による在独ソビエト部隊の生活展の中に「ベルリン旅団」(Berlin-Brigade)の兵営内と訓練の写真もある(Tagesspiegel 17.12.2019)。]

軍政部跡は 1950 年代半ばから主要建物と講義棟を KGB がソ連外での最大規模のセンターとして利用した。

1963 年 5 月この一帯の立ち入り禁止が「最終的に廃止され、遮断棒と柵が撤去された」。

## 略語

シュタジ = Stasi、東独国家保安省 (MfS) またはその職員の略称。東独時代にはシュタージ (Staasi) とも略称された。

BStU = Die Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR、旧 DDR シュタジ文書連邦保管庁 (2021 年 6 月連邦公文書館にシュタジ文書を移管して解消したが、県支部は同文書館分館として存続)。

CARE = Cooperative for American Remittances to Europe、ヨーロッパ向け救援物資発送協会 (米国 NGO)

CRALOG = Council of Relief Agencies Licensed to Operate in Germany、ドイツ内認可救援機関協議会 (戦後占領下のドイツで活動した米国 NGO)

DR = Deutsche Reichsbahn、ドイツ帝国鉄道 (東独がこの会社と社名を継承。西独は連邦鉄道とした)

FDGB = Freier Deutscher Gewerkschaftsbund、自由ドイツ労働同組合同盟 (ソ連占領地区で生まれ東独に 1990 年まで存在した労組の全国組織)

GRU = Главное разведывательное управление (Glavnoye Razvedyvatelnoye Upravleniye)、ソ連軍参謀本部情報総局

KJV(D) = Der Kommunistische Jugendverband (Deutschlands)、(ドイツ) 共産主義青年同盟

KPD = Kommunistische Partei Deutschlands、ドイツ共産党 (1918 年末設立、ナチ政権下で非合法化、戦後合法化した)、東独では 1946 年 SPD と「合同」して SED になり、西独では 1956 年非合法化)

OdF = Opfer des Faschismus、ファシズム犠牲者

OSS = Office of Strategic Services、戦略諜報局 (CIA の前身、1942 設置、大戦の戦略情報収集・分析と抵抗運動支援など実施)

RFMB = Roter Frauen- u. Mädchenbund、赤色婦人少女同盟

PDS = Partei des Demokratischen Sozialismus、民主的社会主义党 (SED が 1990 年 2 月改称、現左翼党の前身の 1 つ)

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党 (1946 年ドイツ内ソ連占領地区 (東独) 内のドイツ共産党と社会民主党が「合同」して誕生した東独支配党、現ドイツの左翼党 (Die Linke) の前身の 1 つ)

SKK = Sowjetische Kontrollkommission、ソビエト管理委員会

SMAD = Sowjetischen Militäradministration in Deutsch-

land、在独ソ連軍政部

SPD = Sozialdemokratische Partei Deutschlands、ドイツ社会民主党 (19 世紀からの政党で、ドイツないし西独の政権を度々担い、2021 年久しぶりに政権に復帰した)

USPD = Unabhängige Sozialdemokratische Partei Deutschlands、独立社会民主党 (SPD のうち戦争継続反対派が 1917 年分離独立、その後一部は KPD に移り、主流派は SPD に復帰した)

USC = Unitarian Service Committee、ユニテリアン奉仕委員会 (1961 年以後 UUSC)

USSBS = United States Strategic Bombing Survey、米国戦略爆撃調査団

UUSC = Unitarian Universalist Service Committee、ユニテリアン・ユニバーサリスト奉仕委員会

WEB = Westeuropäisches Büro der Kormintern、コミンテルンの西欧ビューロー (西欧におけるコミンテルンの非合法活動とスパイ活動の機関)

ZK = Zentralkomitee、中央委員会

ZPKK = Zentrale Parteikontrollkommission、中央党統制委員会 (SED の党内統制機関)

## 引用文献

(本文記載の URL を除く。引用時の J 付きページは邦訳ページであるが、訳文は必ずしも同じではない。)

青木國彦 (2016) ソ連政治局ブレジネフ・ドクトリン放棄 (1981 年 12 月 10 日) のその後: 東独をめぐる西独とソ連の綱引き、比較経済体制学会弘前大学大会 (2016.06.04) 報告フルバージョン (当時のみ同学会ウェブサイトに掲載、ファイル送付可。加筆して発表予定)

朝日新聞 (1989.6.17) バルト3国併合ナゾ解明へ秘密議定書に本格的なメス ソ連 (白井久也記者)

----- (1989.8.23) バルト3国の併合“決定”の独ソ秘密議定書、ソ連が初公開

----- (1992.10.30) 独ソの秘密議定書、ロシアで原本確認

----- (1992.11.17) 独ソ不可侵条約の「秘密議定書」が見つかった (レポート・国際) (アエラ)

クリヴィツキー (根岸隆夫訳) (1962) 『スターリン時代』みすず書房

斎藤治子 (1995) 『独ソ不可侵条約: ソ連外交秘史』新樹社

沢田千一郎 (1976) コミンフォルムとチトーイズムの発生、『ソ連・東欧学会年報』

『スターリン全集別巻: 日本版・レーニン主義の諸問題』(中城龍雄刊行) 真理社 1950

『スターリン戦後著作集』スターリン全集刊行会訳 1954、大月書店

星乃治彦 (2001) ヴァイマル末期ドイツ共産党の党内事情: 「ノイマン・グループ」の評価をめぐる、『熊本県立大学文学部紀要』第 7 巻

----- (2009) 『赤いゲッペルス: ミュンツェンベルクとその時代』岩波書店

ノーマン・ポルマー、トーマス・B・アレン (熊本信太郎訳) (2017) 『スパイ大事典』論創社

盛田常夫 (2020) 『体制転換の政治経済社会学: 中・東欧 30 年の社会変動を解明する』日本評論社

ラーズ・リー、オ・ナウモフ、オ・フレヴニョクリー編 (1996) 『スターリン極秘書簡: モロトフあて 1925 年-1936 年』大月書店

アンソニー・リード、D. フィッシャー (根岸隆夫訳) (2001) 『ヒトラー

なり 1955 年 5 月のソ連・東独友好条約締結に伴いそれも廃止され、ソ連大使館と駐留ソ連軍 [と KGB] が代役となった。

( <http://www.hdg.de/lemo/kapitel/geteiltes-deutschland-gruenderjahre/weg-nach-osten/sowjetische-kontrollkommission.html> )

<sup>11</sup> SKK (1949 年 10 月 ~ 1953 年 5 月) は東独に対して「ポツダム協定その他の連合諸決定の実行を監視する」という名目であったが、実態は「モスクワからの非常に詳細な指示」を東独指導部に厳守させ、同時に東独の国内情勢について本国に「報告と評価」を伝えた。スターリンの死後「在独ソ連高等弁務官事務所」に

- とスターリン:死の抱擁の瞬間』上下、みすず書房
- ヴォルフガング・レオンハルト (菅谷泰雄訳、1992)『裏切り:ヒトラー＝スターリン協定の衝撃』創元社 (原書: *Der Schock des Hitler-Stalin-Paktes*, Knesebeck u. Schuler, 1989)
- Baumgartner, Gabriele u. D. Hebig (Hg.)(1997) *Biographisches Handbuch der SBZ/DDR 1945-1990*, K. G. Saur.
- Buber-Neumann, Margarete (1957) *Von Potsdam nach Moskau: Stationen eines Irrweges*, Deutsche Verlags-Anstalt. マルグレーテ・ブーバー＝ノイマン、片岡啓治訳 (1968)「ポツダムからモスクワまで」、筑摩書房編・刊『現代世界ノンフィクション全集』8 所収。この邦訳には Buber-Neumann (1957) の訳とある (同書:130) が、全 11 章 (エピソードを含む) の訳ではなく 3 つの章の抄訳である。また著者名を Margrete と誤記、そのため訳文でもマルグレーテ (正しくはマルガレーテ) となっている。
- Fricke, Karl Wilhelm (2003) Markus Wolf (\*1923): Drei Jahrzehnte Spionagechef des SED-Staates, in: Krüger, Dieter; Armin Wagner (Hg.) *Konspiration als Beruf: Deutsche Geheimdienstchefs im Kalten Krieg*, Ch. Links.
- Kuczynski, Jürgen (1992) *"Ein linientreuer Dissident": Memoiren 1945-1989*, Aufbau. クチンスキー (照井日出喜訳 1998)『クチンスキー回想録 1945-198』大月書店
- Leonhard, Wolfgang (1955) *Die Revolution entlässt ihre Kinder*, Kiepenheuer & Witsch, 高橋正雄序・渡辺文太郎訳『戦傑の共産主義:ソ連・東独からの脱出』月刊ペン
- (1992) *Spurensuche: vierzig Jahre nach Die Revolution entlässt ihre Kinder*, Kiepenheuer & Witsch.
- Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010), *Wer war wer in der DDR*, Ch. Links.
- Tagesspiegel (17.12.2019) Ausstellung in Berlin-Karlshorst: Wie sowjetische Truppen in Deutschland lebten, in: <https://www.tagesspiegel.de/berlin/ausstellung-in-berlin-karlshorst-wie-sowjetische-truppen-in-deutschland-lebten/25291324.html>
- Velázquez-Hernández, Aurelio (2019) The Unitarian's Service Committee Marseille Office and the American networks to aid Spanish refugees. (1940-1943), in: *Culture & History Digital Journal* 8(2)
- Weber, Hermann u. A. Herbst (2008) *Deutsche Kommunisten: Biographisches Handbuch 1918 bis 1945*, Überarbeitete und stark erweiterte Auflage, Karl Dietz.
- Wolf, Markus (1997) *Spionagechef im geheimen Krieg: Erinnerungen*, List.
- ZK der SED (1952) *Dokumente der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands*, Bd.3, Dietz.

『社会主義体制史研究』既刊  
Historical Studies of Socialist System (past issues)

in: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

**No. 26 (Feb. 2022)**

Yoji Koyama

What was Soviet and East European Socialism: Its Historical Lessons and Future Society

**No. 25 (Dec. 2021)**

Benon Gaziński

Roman Dmowski on relations with Russia at the turn of the 19th and 20th centuries and in the interwar period. "Historia magistra vitae est" - what could be learned from that history lesson?

**No. 24 (Dec. 2021)**

Benon Gaziński

System transformation vs. European integration.: A case study of Poland and her agriculture in historical retrospection

**No. 23 (Oct. 2021)**

青木國彦

東独秘密警察をめぐる女優グレルマンと元夫・俳優ミュエの争い:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Der Streit Jenny Gröllmanns mit Ex-Ehemann Ulrich Mühe über die Stasi-Verstrickungen: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

**No. 22 (Sep. 2021)**

Yoji Koyama

Emigration from and Immigration to Poland: A Typical Case of Central Europe

**No. 21 (Sep. 2021)**

青木國彦

東独秘密警察(シュタジ)の作戦規定と組織:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Operative Bestimmungen und Organisationen der Staatssicherheit der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der andere"

**No.20 (Sep. 2021)**

青木國彦

東独体制転換過程の起点となった演出家クリーアと歌手クラウチクの闘い

Kunihiko AOKI

Der Kampf F. Kliens und S. Krawczyks für die Wende in der DDR

**No.19 (Aug. 2021)**

青木國彦

東独における職業禁止と自由業:ドイツ映画「善き人のためのソナタ」に関連して

Kunihiko AOKI

Das Berufsverbot und die Freiberufler in der DDR: Im Zusammenhang mit dem Film "Das Leben der anderen"

**No. 18 (July 2021)**

青木國彦

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題

「他人の生活」)(2): 批評の批評

Kunihiko AOKI

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (2): Rezension der Rezensionen

**No. 17 (February 2021)**

Yoji Koyama

Germany: Core of EU-Visegrad Economic Relations

**No. 16 (December 2020)**

Yoji Koyama

Political Economy of the Baltic States

**No. 15 (December 2020)**

Yoji Koyama

Slovenia: the Best Performer of the Former Yugoslavia

**No. 14 (December 2020)**

青木國彦

脚本に見るドイツ映画「善き人のためのソナタ」(原題「他人の生活」)(1): 宣伝と実際

Kunihiko AOKI

"Das Leben der anderen" im Filmbuch von F. H. von Donnersmarck (1): Werbung und Wirklichkeit

**No. 13 (June 2020)**

青木國彦

アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀: 東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)

Kunihiko AOKI

Die heimliche Kämpfe um die Anthologie »Berliner Geschichten« in der DDR: Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (3)

**No. 12 (Feb. 2020)**

青木國彦

東独文化政策の規制と緩和(1963-1976年)ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について(2)ー

Kunihiko AOKI

Die schwankende Kulturpolitik in der DDR (1963-76): Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (2)

**No. 11 (Nov. 2019)**

Yoji Koyama

Emigration from Lithuania and Its Depopulation

**No. 10 (Sep. 2019)**

青木國彦

1973年第10回世界青年学生祭典(東ベルリン)に見る自由化百景ー東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について(1)ー

Kunihiko AOKI

Hundert Ansichten der X. Weltfestspiele der Jugend (Ostberlin, 1973): Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (1)

**No. 9 (Aug. 2019)**

青木國彦

東独通貨マルクの対外関係: 最低交換義務、公式・ヤ

- ミレート、末期状況  
Kunihiko AOKI  
Auswärtige Beziehungen der DDR-Mark: Das Mindestumtausch, die Kurse und die letzte Zustände  
**No. 8 (June 2019)**  
青木國彦  
東独通貨マルクのヤミレートの暴落 (1987 年 1 月)  
Kunihiko AOKI  
Der inoffizielle Kurs der DDR-Mark purzelte dramatisch (Jan. 1987)
- No. 7 (May 2019)**  
Yoji Koyama  
Emigration from Romania and Its Depopulation
- No. 6 (Jan. 2019)**  
青木國彦  
ケネディのベルリン演説 (1963 年 6 月) 再考: ブラント東方政策との比較  
Kunihiko AOKI  
A Rethinking of J. F. Kennedy's Address at the West Berlin Town Hall (June 26, 1963): In comparison to the "New Ostpolitik" of Willy Brand
- No. 5 (Dec. 2018)**  
青木國彦  
東独国境の射撃停止命令 (1989 年 4 月 3 日) の混乱とハンガリー国境フェンス撤去: ベルリンの壁ショットセー通り検問所事件の支配党への衝撃  
Kunihiko AOKI  
Die ungeordnete „Aufhebung des Schußbefehls“ in der DDR (03.04.1989): Die SED war schockiert über den Fall „Grenzübergangsstelle Chausseestraße“ und den Abbau von Grenzsicherungsanlagen in Ungarn

- No. 4 (Nov. 2018)**  
Yoji Koyama  
Migration from New EU Member States in Central and Eastern Europe and Their Depopulation: Case of Bulgaria
- No. 3 (Nov. 2018)**  
青木國彦  
ベルリンの壁最後の射殺ギュフロイ事件 (1989 年 2 月) の詳細とその意味: 「1988 年 12 月にホーネッカーが射撃命令を制限」 (少尉ハンフ法廷証言) の真偽  
Kunihiko AOKI  
Was war der Fall Chris Gueffroy in der DDR: Eine Überprüfung der Aussage des Unterleutnant Alexander Hanfs „Honecker habe im Dezember 1988 den Schießbefehl eingeschränkt“
- No. 2 (Aug. 2018)**  
青木國彦  
CSCE (全欧安保協力会議) ウィーン会議へのホーネッカーとシュタジの対応: 東独の新外国旅行政令と「壁は 100 年存続」発言  
Kunihiko AOKI  
Die Reaktion der DDR-Führung gegen Abschlissendes Dokument des Wiener Treffens der KSZE
- No. 1 (May 2018)**  
青木國彦  
元東独政治犯ガルテンシュレーガーの冒険: 東独国境自動射撃装置 SM-70 奪取の意味と限界  
Kunihiko AOKI  
Abenteuer des ehemalige politische Häftlings der DDR Michael Gartenschläger: Warum und wofür montierte er die Selbstschußanlagen SM-70 ab?